

男性一人称語りのストラテジー

—— パルド＝バサン『あるキリスト教徒の女』と『試練』(1890) ——
(前 篇)

大 楠 栄 三

I 書く女性／語る男性

はじめに

エミリア・パルド＝バサン Emilia Pardo Bazán (1851-1921) の小説第 9 作『あるキリスト教徒の女』 *Una cristiana* と第 10 作『試練』 *La prueba* はストーリーの連続と、初版における「前篇おわり」や「『あるキリスト教徒の女』の後篇」(fig. 2) というパラテキスト的記載¹⁾ から、一つの作品の前篇・後篇として構想されたことが明らかである。よって本論では、2 作品を合わせて *Uc-Lp* と記述する。

パラテキスト：女性性²⁾

Uc-Lp が出版された 1890 年、書店で前篇『あるキリスト教徒の女』を手に取り、ページをめくり始めた読者を思い浮かべてみよう。初版本の背表紙、表紙、扉 (fig. 1) には、当時スペインで名を知らぬ者のいない売れっ子女性作家 “EMILIA PARDO BAZAN”³⁾ の氏名とタイトル “UNA CRISTIANA” の記載がある。読者は、当然、女性作家が著した、女性を主人公とした小説世界を期待するだろう。

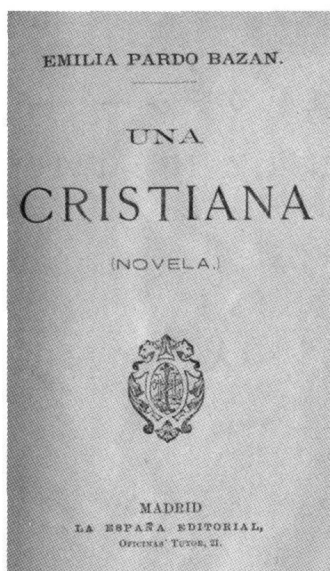


fig. 1 *Uc* 初版第 5 ページ

出典：E. Pardo Bazán, *Una cristiana*, Madrid: La España Editorial, sin año.

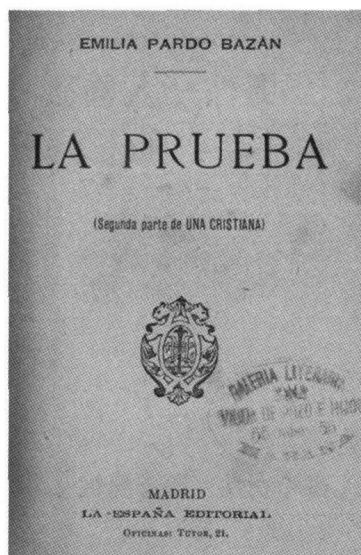


fig. 2 *Lp* 初版第 5 ページ

出典：E. Pardo Bazán, *La prueba (Segunda parte de Una cristiana)*, Madrid: La España Editorial, sin año.

4 ページ目の同著者による既刊本リスト (fig. 3) には、小説 10 冊 (『あるキリスト教徒の女』を含め)、批評・歴史書 6 冊、旅行記 3 冊、詩集 1 冊のタイトルが並んでいる。その中に、『アッシジの聖フランシスコ：13 世紀』*San Francisco de Asís (siglo XIII)* (1882) というフランシスコ会の創始者についてのエッセイや、『私の巡礼』*Mi romería* (1888) という、ローマ教皇に謁見するスペイン人キリスト教徒の巡礼ツアーに同行取材したルポルタージュがあるように、パルド＝バサンが正統なカトリック教徒であることは周知のことであった。事実、文芸批評家・小説家として名をはせていたクラリンは、『あるキリスト教徒の女』というタイトルから次のような期待を抱いたと記している――

『アッシジの聖フランシスコ』の著者が選んだ「示唆に富む」タイトル

のもと、私はまったく異なることを期待していました。筆を執る同じキリスト教徒の淑女自身の、誠実に痛々しい、自然な打ち明け話でないとしても、少なくとも、信奉するカトリシズムと自然主義にもかかわらず、ドーニャ・エミリアが、これまで一度もお話にならなかった奥深く重要なことについて、何かその端緒でも初めて「一気に」お話しになるのだと思ったのです⁴⁾。

クラリンは、「エミリア・パルド＝バサン」＝「あるキリスト教徒の女」と連想し、作家が自らの宗教的信条を綴った自伝的内容を本書に期待した。同じ期待を、当時の一般読者が抱いた可能性は極めて高いだろう。1886年パルド＝バサンは出版社の要望に応え、後に彼女の代表作となる『ウリョーアの館』冒頭に「自伝スケッチ」“Apuntes autobiográficos”を付し、自分がいかにして作家となったのか私生活の一面を公表したのだから、これはあながち根拠のない期待ではない。このように、『あるキリスト教徒の女』において作者名とタイトルというパラテキスト要素は、「女性性」(feminidad)に満ちている。

書き出しの「わたし」：男性

しかし、7ページ目 (fig. 4) を開き第1章の書き出しを読み出すとどうだろう。いきなり「わたし」が読み手に「あなた方」“ustedes”を使って話

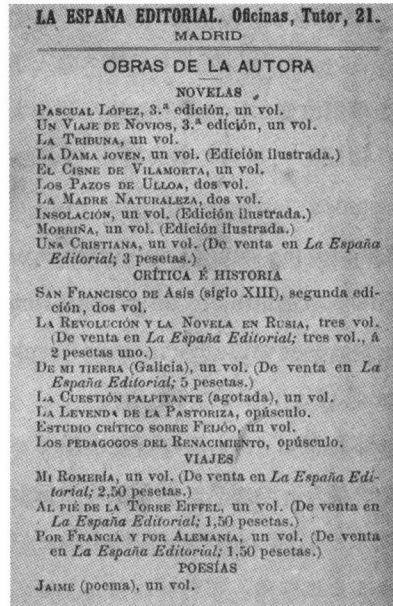


fig. 3 Uc 初版第4ページ

出典：E. Pardo Bazán, *Una cristiana*, Madrid: La España Editorial, sin año.

しかけてくる——「皆さん、ご覧ください。わたしが土木学校への入学を準備するために政府が飲み込むように課した科目の数々を」“Verán ustedes las asignaturas que el Estado me obligó a echarme al cuerpo con objeto de prepararme a ingresar en la Escuela de Caminos” (Uc I: 5)⁵⁾。

本作品は1879年の処女小説『パスクアル・ロペス：医学生自伝』以来、11年ぶりの一人称小説ということになる。この「わたし」は、前述の読者の期待——作者＝ヒロイン——からすれば、もちろん女性、あわよくばパルド＝バサン本人となるはずである。

ところが、まさに書き出しの一行によって、読者の期待は裏切られてしまっている。女性が大学に入学するために特別の許可が必要で極めて困難だった当時、土木技師“ingeniero de caminos”を目指す「わたし」は女性ではありえない⁶⁾。

第1段落、「わたし」は土木学校入学のための必修科目を列挙するが、ここで使用されている名詞と形容詞によっても「わたし」の男性という性は文法的に明示される。「わたし」は第2章末まで寄宿した2軒の下宿屋と下宿人たちについて語るのだが、下宿人が皆男性ということもあって、極めて男臭い内容で、「男性性」(masculinidad)に満ちている。つまり、読者は「わたし」の名が「サルスティオ」“Salustio”(男性名)だと示される初版19

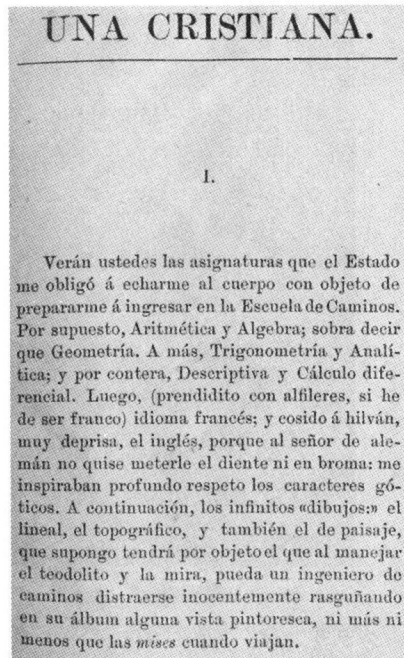


fig. 4 Uc 初版第7ページ

出典：Ibid.

ページ目（小説冒頭から13ページ目）を待たずして、書き出し1行目から、著者「エミリア・パルド＝バサン」＝タイトル「あるキリスト教徒の女」＝語り手「わたし」という期待を裏切られ、「書き手は女性／語り手は男性」という性的ズレを感じつつ読み進めることになる。

「わたし」は、前篇『あるキリスト教徒の女』全22章（281ページ）と後篇『試練』全20章（290ページ）をとおして例外なく全篇を語る。つまり、*Uc-Lp* は、男性の「一人称語り」、ジュラルール・ジュネットの用語を使うなら、「わたし」が「サルスティオ」という作中人物として小説世界に登場する、「等質物語世界的な homodiégétique 語り」の小説ということになる。

上述の読者への裏切りとは、作者名とタイトルが示すパラテキストの「女性性」に対して、テキストが帯びる「男性性」という性的な不一致に起因するものだが、これは当時の批評家（Luis Alfonso）も感得している。

アルフォンソは、出版直後（1890年9月21日）の書評で、語り手「わたし」を男性とした *Uc-Lp* の設定に、「読者の眼に男性と見なされ」ようとしたパルド＝バサンのこだわりを読み取っている。「わたし」を女性にした場合、書いたものが「女性っぽく（afeminado）なって」しまい、軽蔑的なニュアンスを帯びる「女性作家（literata）」や「女性詩人（poetisa）」と同類と見なされるのを避けたにちがいない⁷⁾。しかし、どれほど小説世界でサルスティオが男性として考え、話そうと努めても、読者の眼前には「エミリオ（Emilio）ではなくエミリア（Emilia）と書かれた本の扉がある」のだから無理がある。「少なくともデュドヴァン夫人は、常に男性服を着るほか、作品の扉にオーロール・デュパンではなくジョルジュ・サンドと印刷していた」と、フランスの女性作家に倣って男性名を名乗ることを勧める⁸⁾。アルフォンソの評言は、女性作家が作品に一人称の語りを採用した場合、語り手「わたし」は当然女性であるべきだという、19世紀後半スペインにおいて一般的だった読者の感性を証していると言える。

タイトル『あるキリスト教徒の女』 のズレ

全篇 *Uc-Lp* のあらすじはこうなる——スペイン北西部、ガリシア地方の片田舎出身のサルスティオが、マドリードの土木学校に入学する。彼は日頃から叔父フェリペ（母親の弟）にいろいろ世話になっているが、その叔父が結婚するという。サルスティオは紹介された叔父の許嫁、後の妻カルメンに次第に惹き付けられ、恋してしまう。さまざまなエピソードの末、叔父はハンセン病で死去。最後に、本作は大学を修了し土木技師となったサルスティオが、大学時代を回想して綴った自伝だということが明かされる。

ちなみに、読者が前篇タイトルの「あるキリスト教徒の女」、カルメンと出会うのは前篇第8章、281ページからなる初版の100ページ目になってから。その後も、第10章冒頭でサルスティオとの形式張った会話があるだけで、第14章、モレーノ神父との早朝の密会まで、読者はまともにカルメンの言葉と接することはない。つまり、読者は前篇『あるキリスト教徒の女』全22章中、半分以上のページで、キリスト教徒の女に接することはないのだ。

対して、全篇の語り手であると同時に、虚構上の作者でもあるサルスティオは、当然全ページに登場する。こうした表面的なデータからも、*Uc-Lp*

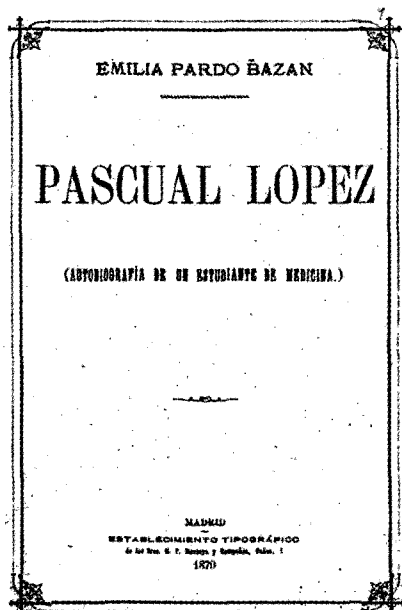


fig. 5 初版第5ページ

出典：E. Pardo Bazán, *Pascual López: autobiografía de un estudiante de medicina*, Madrid: M. P. Montoya y Cía, 1879.

の主人公がサルスティオであることは疑い得ない。だとしたら、なぜ前篇に『あるキリスト教徒の女』というタイトルを付けたのか？

すでに指摘したように、パルド＝バサンは彼女にとって初めての小説に、自伝形式を採用している。1879年に上梓した『パスクアル・ロペス：医学生自伝』*Pascual López. Autobiografía de un estudiante de medicina* (fig. 5)。北スペイン、ガリシア地方の古都サンティアゴ・デ・コンポステーラを舞台に、医学生パスクアルが放埒な大学生活と娘パストーラとの悲恋を回想する物語である。ここで素朴な疑問を抱くのは筆者だけだろうか。処女小説と *Uc-Lp* は主人公が大学時代を回想した、同じ自伝形式の作品となっている。パルド＝バサンはなぜ *Uc-Lp* のタイトルを『サルスティオ・メレンデス：土木学生の自伝』*Salustio Meléndez. Autobiografía de un estudiante de Caminos* としなかったのだろうか？

パルド＝バサンは恋人ペレス＝ガルドスに書き送った書簡のなかで次のように *Up-Lp* の着想を伝えている――

旅の途中、ひとつの小説を思いつきました。でも、タイトルは『その男』*El Hombre* ではありません。『カルメン叔母さん』*Titi Carmen* というタイトルになるでしょう（あなたが気に入ると良いのですが）。それは美德の、非の打ち所のない夫人の物語です。読者が軽薄な女性に飽きないよう、音色に変化を付けなければなりません。いずれにせよ、『その男』はとても良いタイトルです。また、死刑執行人、現在の執行人についての小説を執筆することも思いつきました。どうですか？⁹⁾

「死刑執行人についての小説」が小説第11作 (*La piedra angular*) として作品化され1891年に刊行されたことを考えるなら、これが極めて信憑性の高い告白、つまり、この時点で彼女が *Uc-Lp* の具体的な構想を持っていたと推測できる。「軽薄な女性」とは明らかに、第7作『日射病』*Insolación*

(1889)の女主人公アシス・タボアダ(Asís Taboada)を指しており、読者がこうしたタイプのヒロインに飽きないよう着想したのが、「美德の、非の打ち所のない夫人」、まさに *Uc-Lp* のヒロイン、カルメン・アルダオ(Carmen Aldao)の物語というわけである。タイトル『カルメン叔母さん』*Titi Carmen* は、作中「わたし」がカルメンを“*titi Carmen*”と名指しすることと整合している。パルド＝バサンが自賛するタイトル『その男』*El Hombre* とは誰を指すのか。おそらく書簡の受取人ペレス＝ガルドスに間違いない。あなたとの情事を小説にして公表しましょうかという、ふたりの関係を秘することにこだわる恋人への、悪い冗談であろう。

上の書簡によれば、パルド＝バサンは *Uc-Lp* を着想した段階では、カルメンを第7作のヒロイン(アシス)と同様に女主人公とする小説を構想していたことが分かる。だとすれば、起稿後に、サルスティオの比重が大きくなってしまったのだろう。サルスティオの比重が大きくなったのは、彼を語り手「わたし」に設定したからに他ならない。つまり、執筆にかかった後、語り手「わたし」の比重が大きくなり、結果、主人公がサルスティオに代わってしまったと推察できないだろうか。

ただし、脱稿後もタイトルは着想したときのまま変えず、『カルメン叔母さん』=『あるキリスト教徒の女』とした。結果、文芸批評家クラリンが指摘していたように、タイトルと内容とのズレが生じたのである。パルド＝バサンの既刊の小説タイトルと内容との関係を考えてとき、誰もがタイトルと内容とのズレに気付く。第7作『日射病』は、侯爵未亡人のアシスが日射病の影響で若い男と恋に落ちる物語ではなかった。第8作『郷愁』にしろ、召使いエスクラビトゥが自殺したのは郷愁のためでなく、仕えていたブルジョア家庭の息子ロヘリオに捨てられたからだった。このように真のテーマとズレたタイトルを付けることが当時のパルド＝バサンの常套手法であった以上、タイトルのズレに拘泥する必要はないかに思える。しかし、『あるキリスト教徒の女』の場合、タイトルが示す女性性と主人公サルスティオの男性性と

いう、性のズレを内包する問題であることを看過すべきではないと考える。

『あるキリスト教徒の女』は1890年の初出以来、全集に所収されることはあっても単体で刊行されたことがなかった。したがって、作者名、タイトル、書き出しという書物としての「始まり」に、性的なズレを感じ得たのは、初版を手にした読者だけだったことになるが、「始まり」における女性性と男性性というズレは、実は、テキスト全体をとおしてジェンダー的な不安定感をともなって拡大していく。そして、後篇『試練』の終わりで、男性性と女性性の転覆として読者の前に顕在化することになる。

本論文では、こうしたジェンダーのズレが生成されるプロセスを *Uc-Lp* 全体をとおしてたどり、男性の一人称語りを採用するというパルド＝バサンの語りの策略を明らかにし、最後に、その策略に織り込まれた作者のメッセージの読み解きを企図するものである。

そこで、従来の多くの研究のように「キリスト教徒の女」として讃えられるカルメンに重点を置くのではなく、ジェンダーのズレを産み出す第一の要因、主人公＝語り手「わたし」に焦点を当てて考察を進めていこうと思う。

2. 主人公＝語り手「わたし」

自由を希求する合理主義者

『あるキリスト教徒の女』は冒頭の2章で、主人公サルスティオが土木学校に入学してから第2学年のコース末まで、21歳の大学生の下宿生活が語られる。ひとつ目の下宿の場面では、バレンシア出身の放蕩男や50過ぎのポルトガル人医師、専攻の異なる学生たちとのドタバタ共同生活が、ユーモアをこめて描かれている。芸術家風情の優男（Botello）を、カールした長髪、「アレクサンドル・デュマに似た肉厚の赤い唇、ヴァン・ダイク風の口ひげ、輝く瞳に、繊細な褐色の肌をした混血タイプだった」「tenía el tipo mulato—a lo Alejandro Dumas, con labios carnosos y rojos, bigote a lo

Van-Dick, ojos brillantes y piel morena finísima—” (*Uc* I: 9) と、フランスの小説家とフランドルの画家を引いて紹介するように、「わたし」は理系専攻にもかかわらず人文的素養も備えた学生である。

ドタバタ生活を楽しんでいるかに見えたサルスティオは、章の終わり、第1学年末試験でいくつかの科目を落とし再試験になったことを反省し、下宿を出る決心をする――

《ペパ・ウルティアの下宿屋と下宿人たちに感じる、画趣に富む不規律と、支配的な心情やユーモア、現実の軽視は魅惑的である。というのもわれわれの民族に生来のロマン主義、わたしも患うロマン主義の一種を構成しているのだから。[……] わたしはあそこでさまざまな人びとに出会ったが、彼らはあまりにも素晴らしい人たちであるがゆえに、分別や常識をほんの少しも持ち合わせておらず、これからも持つことはないだろう。[……] しかし、捨て去るもの以上にわたしには価値がある。だからこそ、捨て去ることができるのだ》«Esta irregularidad pintoresca, este predominio del sentimiento y del humorismo, y este desprecio de la realidad que noto en la casa y en los huéspedes de Pepa Urrutia, son atractivos, porque constituyen una forma del romanticismo innato en nuestra raza, romanticismo que yo padezco también. [...] Me he encontrado ahí con varias personas que a fuerza de ser excelentes, no tienen ni tendrán nunca un adarme de juicio ni de sentido común. [...] Sin embargo, yo valgo más que lo que dejo, pues soy capaz de dejarlo». (*Uc* I: 15)

ひとつのエピソードが終わる毎に「わたし」が教訓を得るというピカレスク小説の伝統が踏襲された場面である。サルスティオは自分のロマン主義的な一面を認めつつ、一歩引いて仲間を見ることができ、合理主義者だと分

かる。

第2章、2軒目の下宿でサルスティオは生涯の友となるルイス・ポルタル（Luis Portal）と出会う。冗談好きだが勉強は真面目にする、同じガリシア出身のポルタルとサルスティオは、同じく個人主義を標榜することもある、遠慮なく考えを言い合う仲となる。コーヒー商人の息子ポルタルが、お金を稼いで豪勢な食事をし葉巻をくゆらせる、愛人をかかえ裕福で美しい娘と結婚することを夢見るのに対し、サルスティオは——「こうした富を蔑視するわけではなかったが、具体的にはどれも欲せず、ただ自由を熱望していた。自由と共にとても美しい何かがやって来る気がしたからだ」“yo, sin despreciar estos bienes, no aspiraba concretamente a ninguno de ellos, sino sólo a la libertad, presintiendo que con ella vendría algo muy hermoso”（*Uc* II: 21）。「自由」を希求するサルスティオは、単なる夢想家というわけではない。

共和制を支持するふたりだが、ポルタルが、譲歩を繰り返したおかげで君主制支持とも言えるほどのカステラール派¹⁰⁾の便宜主義者であるのに対し、サルスティオは「ピ・イ・マルガイ派¹¹⁾」の急進主義者で、スペインは過去と一点たりとも妥協すべきではない。むしろ逆に深く進歩的な変化の道を確認たる意志で一気に突き進むべきだ”“yo radical, de los de Pi, convencido de que en España no es lícito transigir ni un punto con lo pasado, al contrario debemos entrar resueltamente y de una vez por la senda de la transformación honda y progresiva.”（*Uc* II: 22）と主張する。つまり、サルスティオはスペインの革新を目指す自由主義者であり、たとえばガリシア州の（スペイン本国からの）独立を、さらにポルトガル併合をとおして「イベリア連邦」“federación ibérica”の創設を夢見るインテリなのだ。

ただし、こうした政治的な議論は食事中、議論することで互いをよく知り、インテリの付き合いを味うためであり、第2章末には、下宿仲間たちと当時流行していたオペラ¹²⁾を王立劇場で観劇する様子が描かれる。

ビダーが評するように、サルスティオは、「教養あるエンジニアで、自分を過去の規範を壊す自由主義者だと見なす若者」¹³⁾なのである。

叔父フェリペの醜悪化

学費を援助してくれる母の弟と初言及¹⁴⁾されていた叔父フェリペ (Felipe) は、第3章冒頭に登場し、お腹を空かせ下宿に帰ってきたサルスティオを、カフェ・フォルノス (café Fornos) という、アマデオ1世やアルフォンソ12世といった当時の王家の面々も足繁く通ったレストランへ昼食に誘う。

ところが、サルスティオは、勉強を口実に同伴をためらう。そして、いったん話を中断し、読み手に、叔父に好意や敬意はもちろん感謝の気持ちも抱いたことがないと告白する。さらに続けて、自分を正当化するため家族の素姓とともに「叔父の肉体的・道徳的なシルエット」“la silueta física y moral de mi tío Felipe” (Uc III: 28) を語り始める。

自分の父方の姓は“Meléndez Ramos”で、母方は“Unceta Cardoso”。後者の“Unceta”という姓から母の父がバスク地方出身だと分かるが、問題は祖母の姓“Cardoso”。これはガリシア地方ポンテベドラ (Pontevedra) 近郊の漁村マリーン (Marín) に在しているカルドッソ家であり、ポルトガルのユダヤ人家系から分岐した一族だという。サルスティオは幼少時このことを口にして母親に叱られた経験から、「ユダヤ教徒の末裔であることは汚点で恥辱だ」“ser de casta de judíos era mancha y baldón” (Uc III: 28) と学ぶ。成長するなかで「宗教的危機」を迎え、いつの間にか信仰を失い「自分は合理主義者として生まれたと思う」“Creo que nací racionalista” (Uc III: 29) ほどのサルスティオだが、友人に「いかさまユダヤ人」“judío tramposo” とからかわれたことが脳裏に刻まれている。土地の識者にマリーン生まれのユダヤ教徒について尋ね、異端審問所で拷問を受けた「指の曲がったハンセン病人」“leproso y gafo” と呼ばれた人物 (Juan Manuel Cardoso Muiño) のことを聞き出す。

マドリード上京後、この「汚点」“mancha”を思い出しては、ユダヤ教徒は「宗教的な概念」をもたらした高貴な民族であり、今では裕福なユダヤ人資本家たちはフランス貴族と婚姻関係を結び、著名な思想家（スピノザ）や詩人（ハイネ）、作曲家（マイエルベアー）を輩出しているではないか、と自分を納得させようとする。ところが、自分のなかに流れる「旧キリスト教徒の血」“las gotas de sangre de cristiano viejo”が反発し、ユダヤの血に対して「感情の遺伝的懸念から生まれた本能的な嫌悪感」“una repugnancia instintiva, hija de preocupaciones hereditarias emocionales”を抱いてしまうと言う（Uc III: 30）。

ここで叔父に話かもどり、母の弟、この頃 42 か 43 歳だった叔父は、太り気味だったがフサフサした頭髮とヒゲ、背が高いおかげで「好青年」で通っていた。「しかし、問題なのは、一見して叔父がユダヤ民族の特徴すべてを明示していたことだ」“Pero el caso es que, desde el primer golpe de vista, mi tío ofrecía patentes los rasgos todos de la raza hebraica”（Uc III: 31）と語り始める。

赤ヒゲと縮れた頭髮はわたしの叔父をキリスト受難の死刑執行人にしていた。母の弟の「神殺し」の顔こそが、自分に子供の頃から克服しようのない冷たい怒りの憎悪を抱かせた要因だったことは、わたしには明らかだった。害を一切与えない爬虫類が引き起こす憎悪とおなじであり、わたしの合理主義的考えも科学的実証主義も、さらに嫌いな人物であれこんなにも自分を助け庇護してくれているのだと、どんなに説得しても根絶やしできなかった憎悪なのだ。La barba rojiza, el pelo crespó, acababan de hacer de mi tío un sayón de los Pasos. Y para mí era evidente: la cara de *deicida* del hermano de mi madre fue lo que me infundió desde la niñez aquella repulsión airada, fría, invencible, cual la que inspira el reptil que ningún daño nos infiere:

repulsión que no pudieron desarraigar ni mis ideas racionalistas, ni mi positivismo científico, ni la persuasión de que tan aborrecido sujeto me protegía y amparaba. (*Uc* III: 31)

合理主義者を標榜するサルスティオは、本能的な反ユダヤ主義以外に、叔父を毛嫌いする根拠を探そうとする。思い当たるのは、叔父が「何の利点も、道徳的や知的な素質もなく、良い境遇を手に入れている」“sin mérito alguno, sin condiciones morales ni intelectuales, había sabido granjearse posición” (*Uc* III: 32) 点だとして、大学修了時に大した財産を有していなかった叔父が、地方の政治家として上手く立ち回った結果、相当の財をなしていったことを詳述する。恩を仇で返すことになるかと自責の念に駆られつつも、叔父の繁栄にいらだち、彼が「お金に汚くケチ」“aprovechado y tacaño” だったから蓄財できたのだとして、結局、「ユダヤ人の特性」“otro síntoma de hebraísmo” に回帰してしまう (*Uc* III: 33)。

第5章、学年末試験をすべてパスしたことを伝えようと叔父を訪ねたサルスティオは、結婚後の新居を案内される。各部屋に関して、応接間は「低俗の極み」“archivulgar”，大臣用デスクのある書斎も、蔵書は「行政の分厚い書籍と、装丁がこわれ垢にまみれた猥褻で馬鹿げた三文小説」“no encerrar más que macizos libros de administración y media docena de noveluchas tontas y obscenas, todas desencuadradas y llenas de mugre” だけだと、趣味の悪さをあげつらう (*Uc* V: 44-45)。その上、叔父は「守銭奴たちと同様、並外れた出費を決意したとき、人びとがそれに気付くのを好んだ」“como los tacaños todos, cuando se decidía a un gasto extraordinario, gustaba de que lo notase la gente” と皮肉を言う (*Uc* V: 44)。結婚式に列席して欲しいと叔父から旅費を渡されたときも、サルスティオは次のように彼の欲深さをユダヤ人と関連づける――

楽しむためにお金を入手することのできる眼前の金に汚い男の下に、わたしには強欲な鉤指をした中世のヘブライ人が見えていた。いくらかであれお金を支払うときはいつも、叔父の頬はわずかに青白くなり、口は曲がり、視線による表情を隠したいかのように、眼が床をさまようのだった。Pero bajo el hombre aprovechado de hoy, que sabe adquirir para gozar, yo veía al hebreo de la Edad Media, de ávidos y ganchudos dedos. Siempre que aflojaba alguna suma, las mejillas de mi tío palidecían un poco, su boca se hundía, y sus ojos vagaban por el suelo, como si quisiese ocultar la expresión de la mirada.

(Uc V: 46)

夜、ふたりは下町の娘たちの家を訪ねるが、飲食物を買いに行かせる際、叔父がどんなにお金を出し惜しみし、出すとしても口を引き攣らせ、いかに醜い顔をするかサルスティオは観察し、欲深さを強調する。

ここまで叔父の容貌と欲深い性格をユダヤ人のイメージと連関させてきたサルスティオは、第21章、カルメンと叔父の口論シーンでは、妻の言葉に耳を貸さない叔父の頑固さを次のように表現する——「ああ、何と無情なヘブライ人の頑固さよ！ キリストが烙印を押したのも充分納得のいくことだ！」“¡Oh dureza empedernida de los hebreos, con cuánta razón te estigmatizó Cristo!” (Uc XXI: 188)。

後篇『試練』になると、自分がカルメンへ接近するのを阻む叔父に「人種特有の用心深い性格」“genio cauteloso de su raza”や、妻という所有物に対する「ヘブライ人の強欲な特質」“naturaleza codiciosa del hebreo”を指摘する (Lp VI: 260; VII: 261)。後篇第14章以後になると、連関がエスカレートし、ハンセン病の発症をユダヤ人の血と関連づけることになる。

ここで再確認しておく、Uc-Lpは「等質物語世界的な」語り、なかでも〈主人公〉が語り手となる「自己物語世界的な」語りの小説である。つま

り、本作の小説世界は主人公「わたし」の視点のみから描かれており、よって、読み手にもたらされるフェリペという人物像、その外見、性格、ユダヤ人との連関イメージはすべて、「わたし」が語った、すなわち創り出したものということになる¹⁵⁾。サンティアネス＝ティオが指摘するように、「母の弟がサルスティオにとって典型的なユダヤ人を体現していた」¹⁶⁾にすぎないのだ。

例えば、上に引用した豪華なレストランでの昼食後、下宿に帰ったサルスティオは事の次第を友人ポルタルに報告する。するとポルタルは、「不適切な振る舞いをしたのはおまえのほうだ」“ahí quien procedió incorrectamente fuiste tú”とサルスティオをたしなめる (*Uc* IV: 38)。「裕福で美しく、若い女性がどうしてわたしの叔父を引き取ることになったのだろうか？」“¿cómo carga con mi tío una mujer así, rica, guapa, joven?” (*Uc* IV: 38)と疑問を呈するサルスティオに、友人は次のように反論する――

おまえの叔父に一体どんな軽蔑すべき点があるというのだ。勉学に励む気が起きなかったとしても、機転が利かないわけではないし、とてもうまくやっている。今では要となる青年で、県内でドン・ビセンテに劣らないほどの影響力をもち、輝かしい政治的未來を築き上げている。¿Qué tiene de despreciable tu tío? Porque no le haya dado por estudiar, no deja de ser listo y de manejárselas muy bien. Es mozo de cuenta: influye en la provincia punto menos que don Vicente, y se ha labrado un porvenir político. (*Uc* IV: 38)

このように、フェリペの外見や欲深さをユダヤ人と関連させ否定的評価をするのは、彼の親族（サルスティオと母親）と結婚相手カルメン (*Uc* XIV: 18) だけであり、第三者は気にも留めていない。

その上、読者はサルスティオの見解の偏向に気付くことになる。サルスティ

オは、ユダヤ人の特性を当然、フェリペの姉にあたる自分の母にも見出す。第6章、叔父の結婚式に参列するために帰省したサルスティオは、夫を早くに亡くし村で自給自足の生活を送る母親を次のように紹介する——「カルドッソ家の血統を懸命に拒絶するわりには、わたしの母はヘブライ民族を特徴づける、獲得本能、浅ましい儉約、そして商才に長けていた」“Con tanto renegar de la estirpe de los Cardosos, mi madre tenía mucho de la adquisividad, la economía sórdida y el genio mercantil que caracterizan a la raza hebrea.” (Uc VI: 54)。サルスティオは、叔父に対して「欲深い」と否定的に評価するユダヤ人の特性を、母親においては「獲得本能」、「儉約」、「商才」と賞している。彼自身、整合性に欠けると思ったのか、評価の違いを母親への愛情のせいにする——「偉大な愛情よ！　どんなに論理の概念を混乱させることか！　叔父において嫌悪した性質が、母においては美德だと思える。必要性に順応することを美德と呼ぶなら、確かにそれは美德にほかならない」“¡Lo que puede el cariño, y cómo enreda las nociones de la lógica! Estas condiciones, que en mi tío me repugnaban, parecíanme virtudes en mamá, y lo eran en efecto, si es virtud acomodarse a la necesidad.” (Uc VI: 54)。

宗教的信条に関しても、実際は教会の教えを表面的に守るだけの母親を、サルスティオは熱烈な信者だと形容する——「間違いなく、古代イスラエルの分派からの遺伝的継承によって、わたしの母親にもっとも根付いた宗教的概念は、怒りっぽく、恨みっぽい、非情な神というものだった」“Sin duda por transmisión hereditaria de la rama israelita, la concepción religiosa más arraigada en mi madre era la de un Dios airado, rencoroso e implacable” (Uc VI: 56)。このように、母親 (Benigna Unceta) が——「寛大な」“benigno” という名前に反し——怒りっぽく、(叔父に対して、昔の財産分与が不公平だったことを決して忘れないといった) 恨み深く、非情な性格であることをユダヤ人からの遺伝に因ると解説するサルスティオだが、そうし

た母親の性格に何ら否定的評価をしない。

要するにサルスティオは、叔父に関してだけユダヤ人の特性をマイナス要素として非難する。もちろん読者は、血縁関係にある（叔父から見て甥にあたる）サルスティオにユダヤ人の特性がどう表れているのかと関心を抱くだろう。ところが、サルスティオは——「わたしの叔父がヘブライ人なら、自分にも家族の汚れが達しているということは考えてもみなかった」“Ni siquiera reflexioné que si mi tío era hebreo, me alcanzaba a mí la mancha de familia” (*Lp* XIV: 337)。

以上のように、サルスティオは、合理主義を表明しながらも、叔父フェリペにあまりに非合理的な評価をくだしている。クックがフェミニズムの観点から叔父に、「当時の男の二面性」——貞潔なカルメンとの結婚を控えておきながら、下町の娘（ベレンなど）の家に楽しみに行き、妻の実家では若い娘（Candidiña）をふざけて追い回す¹⁷⁾——を見出しているが、先に引用したポルタルの評価で明らかなように、当時の男性の価値観から見て、叔父に軽蔑すべき点など一切ない。むしろ、フェリペは一般的に羨むべき男性である。

要するに、語り手「わたし」はきわめて主観的に叔父フェリペを描き出しているのだ。それはいびつな主観であり、歪みはサルスティオが裕福な叔父にいだく嫉妬——相応しい結婚プレゼントを購入できない (*Uc* VI), オペラ座に行くための衣装 (*Uc* XXII) や外出するための服 (*Lp* II-III) がない、マドリードに戻れない (*Lp* XVI) といったエピソードで強調される金銭的窮乏——から来ているのだろう。サルスティオは叔父を、嫉妬心から意図的に醜い人物として語ろうとしているのである。

叔母カルメンの理想化

叔父の結婚相手、新妻となるカルメンについてはどうだろう。*Uc-Lp* で読み手に提示される情報は、発話を除き、すべてサルスティオの主観を介したもののわけだが、「わたし」がカルメンをどんな女性として語るのか、順

を追って確認してみよう。

叔父から結婚の話を聴かされたサルスティオは、相手は近隣の未亡人だろうと思いをめぐらす (*Uc IV: 35*)。友人ボルタルが聴き知ったところによると、ピアノを弾く良家の若い娘で美人とのこと (*Uc IV: 38*)。対して、母は手紙に、健康に恵まれない、かなり醜い娘だと書き送る (*Uc IV: 41*)。叔父が財布から取り出した写真を見たサルスティオは、深夜の街灯の下、カルメンを次のように表現する――

わたしが目にしたのは若々しい顔、広く突き出た額をむき出しにした飾らない髪型、情熱と意志の光線を放つ生き生きとした眼。この眼にわたしは驚いたわけだが、というのも、叔父の婚約者は生気の欠けた穏やかな、自らの受動性ゆえにあらゆる強要に従う女性だと想像していたからだ。わたしが間違いなく見出せなかったのは、母が断定する醜さだった。輝く美しさを備えているわけではなかったが、人の視線をもう一度引き付けるタイプの顔をしていた。 *vi un rostro juvenil, un peinado sencillez, que descubría una frente ancha y convexa, y unos ojos vivos, con un rayo de pasión y voluntad que me sorprendió, pues yo me figuraba a la novia de mi tío apagada y dulce, sometida a todas las imposiciones por su pasividad. Lo que no la encontré fue tan fea como aseguraba mi madre. Tenía una de esas caras que, sin irradiación de belleza, atraen la mirada segunda vez. (Uc V: 51)*

写真を見るかぎりカルメンは美女というわけではないが、「情熱や意志」の強さを示す眼をしており、想像していたような受動的なイメージとは異なる、男性の視線を惹き付ける女性だという。

サルスティオは想像と異なるカルメンに関心を抱いたのだろう。第7章、結婚式に出席するためカルメンの実家に向かう道筋で出会った修道士（モレー

ノ神父)に「どんな女性ですか?」としつこく尋ねる。しかし、神父は「キリスト教徒の女」だと言うばかり——「キリスト教徒の女として、第一に、おそらく唯一賞賛に値する点は、彼女の魂であり、わたくしの口から他の賛辞を申し上げるのは不適切でしょう」“De una cristiana, lo primero y acaso lo único que merece ensalzarse es el alma, y en mi boca sonarían mal otros elogios.” (Uc VII: 66)。

邸宅に着いたサルスティオは、叔父から館の面々を紹介されるが、その中のひとりがカルメン、「中程の背丈で、エレガントですらりとした体型の娘」“una señorita de mediana estatura, de silueta elegante y airosa” (Uc VIII: 69)である。館の住人が多く、なかなかじっくり観察できないサルスティオは、夕食の際カルメンの向かいに座り、やっと「彼女を見つめるという好奇心を十分に満たすことができた」“satisface ansiosamente la curiosidad de mirarla” (Uc VIII: 72)。ここから、カルメンを「見つめる」というサルスティオの行為が *Uc-Lp* 全篇にわたって延々と続くことになる——

わたしは彼女の顔をなめるように見つめた。すぐさま、醜いわけでも美しいわけでもないというモレーノ神父に同意した。エレガントでしなやかな体は顔より好ましかった。というのも、羊の輪郭と言われるタイプの顔は、肌の輝きも、美の基本的な要素である整った顔立ちも備えていなかったからだ。le bebí el rostro. Al pronto di la razón al Padre Moreno: ni era fea ni bonita. Su cuerpo, elegante y cimbrador, valía más que su cara, de las que se llaman de perfil acarnerado, desprovista de ese esplendor de la tez y esa corrección de facciones que son elementos primarios de la belleza. (Uc VIII: 72)

サルスティオは、写真同様、決して美しいとは言えない(羊のように額が突き出た)顔ではなく、カルメンの体に関心を示している。その後、次の引

用のように、生气に満ちた点を第一の魅力として挙げる――

しかし、15分の調査の後やっとわたしは、婚約者の美しさにではなく、説明のつかない魅力にともかく票を入れる気になった。情熱的な視線の黒い瞳を開くとき、微笑むとき、そして問いに応えようと振り返るとき、表情豊かな顔に生气があふれ、わたしがこれまで穏やかで冷淡だと想像していたあの顔立ちに、生が駆け巡るのだった。Pero al cuarto de hora de examen, ya me inclinaba a votar, si no por la hermosura, al menos por el inexplicable encanto de la novia. Al abrir sus ojos negros, de mirar apasionado; al sonreír; al volverse para contestar a una pregunta, la movable faz se animaba, la vida corría por aquellas facciones que yo siempre imaginara plácidas y frías (*Uc VIII: 72*)

この引用からも、カルメンがそれほど魅力的な女性でないことは明らかだろう。実際、第9章、友人ポルタルに書き送った手紙のなかでは、カルメンが「キリスト教徒の女のモデル」「modelo de la mujer cristiana」で「品位ある貞節な女」「mujer decente y honrada」だと、彼女のモラルを賞賛するだけで、外見については、エレガントで、「じっくり見つめたなら気に入るような顔で、とても美しい瞳」「con una cara que agrada si se mira despacio: los ojos buenos, y hasta buenísimos」(*Uc IX: 77*)と述べるにすぎない。

サルスティオは、知り合う前から彼女がなぜ叔父と結婚するのか、という疑問を抱いていたが(*Uc IV: 38*)、実際に会った日も、「一見気品あるこの女性が、なぜ叔父みたいな嫌な奴と結婚するのか？ 愛はあるのか？ 愛がないとしたら、なぜ結婚するんだ？」“¿Por qué se casa esta señorita, que parece tan distinguida, con el antipático de mi tío? [……] ¿hay amor? y si no hay amor, ¿por qué hay boda?” (*Uc VIII: 71*)。ポルタルへの手紙で

も、「品位ある貞節な女性（わたしの未来の叔母がそうだと言われているのです）が、結婚するとして、あんな男と結婚することが理解できますか？あの彼女の心に秘密の物語でも隠されているのでしょうか？」“¿Concibes tú que una mujer decente y honrada (dicen que mi futura tía lo es) se case así, por casarse, con semejante hombre? ¿No habrá allá en su corazoncito una historia secreta?” (*Uc* IX: 77) と叔父とカルメンの婚姻に疑念を示す。

この疑問が叔父への嫌悪に端を発していることを、サルスティオ自身次のように認める――

確かに「カルメンが叔父を愛していないという確信は」わたしに一種の内的な革命を引き起こし、叔父がわたしに抱かせるあの克服不可能な嫌悪の情をよみがえらせ、その嫌悪感は、わたしが叔父の未来の妻に気付いたと思ったすべての冷淡さによって補強された。同時に、好奇心に苛立ちながら自問したのだった。なぜこの女性は結婚するのか？ Sé que hizo en mí una especie de revolución interna, renovando aquel sentimiento de repugnancia invencible que me inspiraba mi tío, y reforzándolo con todo el desamor que creí notar en la futura esposa. A la vez me preguntaba con rabia de curiosidad: ¿Por qué se casa esta mujer? (*Uc* XII: 99)

サルスティオは、カルメンが結婚する理由をあれこれ思いめぐらす。母親が指摘するように、実家で冷遇されているかといえばそうではない。実家から出て自分の家を支配したいという、当世の独身女性がもつ独立心によるものでもないようだ。結局、叔父の経済力に思い至る――「おそらく叔父の余裕ある経済状態、疑問の余地のない素晴らしい未来のせいだろう。他のことではありえない」“Probablemente sería a la desahogada posición, al buen

porvenir indiscutible de mi tío. No podía ser otra cosa.” (Uc XII: 100)。

叔父の経済力が結婚の動機だと納得しながらも、日々カルメンを観察するなかで、そのような打算的な考えとは相容れない激しさを彼女のなかに見出す——「表面下に炎が、激しい炎が隠されているにちがいないとわたしには思えてきた」“A mí se me figuraba que debajo de la superficie debía de haber fuego, y mucho fuego oculto.” (Uc XII: 100)。

このようにサルスティオは、叔父はまともな女性に愛されるに値しない、当然カルメンは叔父を愛していないと信じ込み、ではなぜカルメンは叔父と結婚するのかという疑問に囚われ、答えを求めて彼女を〈見つめ〉続ける。第10章では、偶然カルメンと館に二人きりになり結婚祝いの品々を見せてもらう機会があるが、常套句を口にするだけで、彼女の気を惹こうとする素振りは見せない (Uc X: 83-85)。カルメンがそれほど美人でもないのだから、当然だろう。

ところが、彼女を〈見つめる〉うちに、第12章、視線がサルスティオに性的本能を呼び起こすことになる——「男性、愛する自由をもつ若者というわたしの状況にある男性が女性に向ける第一の視線は、まず愛の好奇心を備えた視線だ。《この女性は自分のことを愛しているだろうか？ 愛しているとしたらどうなるだろうか？》という視線なのだ」“Y es que casi siempre la primer mirada de un hombre a una mujer — hombre en mis condiciones, mozo y en disponibilidad amorosa — es mirada de curiosidad amorosa también; mirada que dice: «¿Me querría esta mujer a mí? ¿Cómo sería si me quisiese?».” (Uc XII: 100)。

次の引用で明かなように、サルスティオは彼女も叔父を嫌悪していると思ひ込み、共感から彼女に惹かれ始める——

もしわたしが叔父に好意や敬愛を抱いていたとしたら、すぐさま本能のぼんやりとした声を消し去っていただろう。しかし、逆だった。叔父は

わたしを苛立たせ、わたしの魂をひそかに蜂起させた。叔父の婚約者に同様の感情の萌しを認めたわたしは、恋へとまっすぐに突き進む心理的な同胞愛によって、自分が彼女のほうに惹き付けられるのを感じたのだった。Si yo profesase a mi tío cariño y respeto, yo hubiera apagado sin pérdida de tiempo la voz confusa del instinto. Pero sucedía lo contrario: mi tío me irritaba, me sublevaba el alma secretamente; y al creer advertir en su novia gérmenes de sentimiento análogo, me sentía atraído hacia ella, por una fraternidad psíquica que iba derecha hacia el enamoramiento.

(*Uc* XII: 100)

カルメンは本当に自分が考えるように叔父に冷淡なのか、自分に優しく接してくれるのか、これを確認しようと、サルスティオはカルメンとふたりきりになれる機会を探し求める。偶然の出会いを装っては花束を献げ、彼女とおしゃべりをし、彼女の服や髪を褒め称えたりする (*Uc* XII: 101-2)。サルスティオの〈見つめる〉行為が *Uc-Lp* 全篇にわたって続くと指摘しておいたが、ここからは〈見つめる〉ためにカルメンをしつこく〈つけ回す〉行為が始まる。そして、観察の結果、彼の望みどおりの「事実」を発見する――

わたしは叔父に対する彼女の態度を観察した。知り合ったばかりのわたしには陽気で温かい表情を見せてくれるのに対し、婚約相手には、従順で愛想の良い心づかいを示しつつも、あまりにも丁重で改まった態度で接していた。その態度は門外漢の目には内気さや謙虚さとして受け止められたかもしれないが、わたしには、わたしの魂を照らす邪悪な光の下で見たとき、まったくの冷淡さの症状だと思えた。Observé su actitud respecto a mi tío. Mientras conmigo, hecho ya el conocimiento, se manifestaba alegre y cordial, respecto a su novio demostraba, al par

que sumisión y solicitud complaciente, una formalidad y corrección excesivas que podían ojos profanos tomar por encogimiento o púdica modestia, pero que a mí, vistas a la luz siniestra que alumbraba mi alma me parecieron síntomas de una frialdad absoluta. (Uc XII: 102)

「わたしには」“a mí”，「わたしの魂を照らす邪悪な光の下で見たとき」“vistas a la luz siniestra que alumbraba mi alma”と強調されているように、カルメンが叔父に冷淡だというのはサルスティオにそう見えたにすぎない。しかし、それを確信した彼に、件の疑問がパラノイア的に取り憑くことになる――

このことを発見したと思ったとき、わたしは貞淑な婚約者に対し神秘的な好意の衝動を覚えた。実際に彼女が未来の夫にわたしと同様、冷淡な気持ちを抱いているとしたら、わたしたちはどんなに強固な心理的絆で結ばれていることになるだろう。《新婦に新郎が嫌悪を抱かせている。おそらく彼女自身気付いていないかもしれないが、確かに彼女を不快にさせている。[……]》やはり、永遠の問いの登場だ。《それなら彼女はなぜ彼と結婚するのか？なぜ結婚するんだ？》Cuando creí hacer este descubrimiento, percibí un impulso de misteriosa simpatía hacia la casta novia. Si en efecto ella sentía por su futuro el mismo desvío que yo, ¿cuál lazo psíquico más fuerte podía atarnos? «A la novia la repugna el novio. Acaso ella misma no se da cuenta, pero la repugna. [...]». Después la eterna pregunta: «¿Y entonces, por qué se casa con él? ¿Por qué se casa?». (Uc XII: 102)

サルスティオはカルメンとの距離を縮めようと、ふざけながら「叔母さま」「tía」と呼び始める。それに対してカルメンが、「甥」「sobrino」と親しみを

込めて返答してくれるのを確認した上で、もう一步攻撃を仕掛ける——「『カルメン叔母さん』と呼ぶ許可を求めた。最初の《叔母さん》は優しく子供っぽく、次の《カルメン》は若く美しいという芳しさを備えており、ふたつの名前の組合せはわたしに魅力的に思えた。この時以降わたしは《カルメン叔母さん》という呼び名をアルダオ家のお嬢さんに関係づけ、彼女を他の言い方で呼ぶことは一切しなくなった」“pedí permiso para llamarla *titi Carmen*. Estos dos nombres, el primero tierno e infantil, y más aún el segundo con su fragancia de juventud y belleza, me parecieron encantadores, y desde aquel momento los vinculé en la señorita de Aldao, a quien en mi vida volví a llamar de otra manera.” (Uc XII: 103)。

サルスティオがカルメンを、《カルメン叔母さん》“*titi Carmen*”と呼ぶことにしたというこのエピソードに、当時の読者は、19世紀スペイン随一の小説家ペレス＝ガルドスのベストセラー小説『責め苦』*Tormento* (1884)の1シーンを思い浮かべたかもしれない。第29章、ヒロイン（Amparo）が歪んだ性向の司祭（Pedro Polo）の前に姿を現したとき、司祭はいきなり彼女を《責め苦》“*Tormento*”，《可愛い責め苦》“*Tormentito*”と異常な名で呼び続け、彼女を追い詰める。サモーラは、この命名行為をとおして司祭がアンパーロに対する権限を再確認しようとした、彼女の人生と行為を支配する「父権」“*paternidad*”を証しようとしたと解釈している¹⁸⁾。サルスティオも、《カルメン叔母さん》という命名行為をとおして、自分のなかで、彼女に対する支配権獲得の意思を確認したと解釈できるだろう。その結果、彼の嫉妬の矛先は、支配権を妨げる者、カルメンの告解を受けるモレーノ神父に向かうことになる。

盗み聞き・盗み見

第13章、結婚式が近づくにつれ、悦びを見せるはずのカルメンが叔父にますます冷淡になっていき、対して、モレーノ神父にはほとぼしるような親

愛の情を示しているように、サルスティオには思える。確かに、ふたりは時折素速く視線を交わすことがある。まるで密会の約束を取り付けているように。サルスティオは、ふたりがいつ会っているのかとあれこれ考える——「彼らの立場に身をおいて自分だったらどうするか熟慮してみた。その結果、隠れて会うのに適した時間は早朝しかないと思いついた」“Reflexionando en lo que haría yo si me viese en el caso de ellos, vine a comprender que sólo les quedaba una hora hábil para verse de ocultos: la madrugada.” (Uc XIII: 109)。

サルスティオが早起きを始めて4日目の早朝、邸宅の庭にそびえる大樹“el Tejo”（樹上に3つのフロアーをもつほどの）に上がり、海原の日の出を眺めていると、庭のほうから音がする。館の別の入口からほぼ同時にモレーノ神父とカルメンが姿を現したのだ。落ち合ったふたりは大樹に上がってくる。サルスティオは——「あの会話を聴きたい、必要なんだ、とにかく聴きたいんだ。会話が罪あることであろうと無実であろうと、必ず自分にとって興味深いもののはずだから」“Lo quería, lo necesitaba, ansiaba oír aquella conversación criminal o inocente, pero de seguro interesantísima para mí.” (Uc XIII: 111)。そこでもっとも堅固な枝に跨りうっそうと茂った枝葉の中に身を隠す——「神父と娘がどこに落ち着こうとも、この高さからならふたりのやりとりを聴き、見ることができる」“Donde quiera que el Padre y la señorita se colocasen, a aquella altura yo podía oírlos y verlos.” (Uc XIII: 111)。

ふたりの会話を盗み聞きすることによって、カルメンが結婚する本当の理由を知ることになる——妻を亡くしてから、カルメンの父親は召使い（doña Andrea）と付き合っていた。しかし、彼女も年老いた今、彼女が自分のポジションを保持するために連れてきた親戚の若娘（Candidiña）を追いつめ始めた。娘と正式に結婚するか、外に追い出すかして欲しいとカルメンが懇願しても、父親は一切耳を貸さない。そこで父親の不品行に我慢ならず、家

を出るためにフェリペからの結婚の申し出を受けたというものである。

これを聴いた神父は、婚姻の重大さを説き、フェリペのことを嫌悪しているのかと尋ねる。カルメンは——「嫌悪しているかどうか分かりません。確かなのは、彼にそれほど愛情を、情熱など一切感じていないということ。[……]私は結婚するとき、神の御前で受け入れる夫は、皆から敬愛されるに値する男性であって欲しいと願ってきました。神父さま、ドン・フェリペがそのような男性だとお考えになりますか？」“Repugnarme... No sé. Lo que sé es que no siento por él ni gran cariño, ni nada de ese entusiasmo... [...] Yo quisiera, al casarme, considerar al marido que he de recibir delante de Dios, como a una persona digna de la estimación de todo el mundo... Padre, ¿usted cree que don Felipe es... así?” (Uc XIV: 118)。

カルメンは結婚相手を嫌っているわけではないが、愛してもいないと言う。フェリペが皆に敬愛される男性かという問いに、神父は政治のゴタゴタなどでそれほど好意を持たれていないと答える。すると、カルメンは、好意を持たれない理由が他にあるのでは、「フェリペの顔に目を留められたことがありますか？」と切り返す。そして、サルスティオと同じく、ユダヤ人の顔貌を問題にする——

「彼はユダヤ人の家系です」と花嫁はきっぱりと断定した。「私がこんなことを言うと驚かれるかもしれませんが、神父さまだからこそあえて申し上げるのです。彼はユダヤ人の家系です。人の記憶から消えないほどユダヤ人そのものの顔をしています。だからこそ、嫌悪を感じるかと神父さまに尋ねられたとき、決めかねたのです。あの顔には慣れるまで相当苦労しました。彼が醜いとも素敵だともいませんが、彼の顔だけは……」—Es de judío—afirmó la novia terminantemente—. Le parecerá a usted sorprendente que yo lo diga... No me atrevo a decirlo sino a usted. Es de judío, sí, tan clavada, que no se despinta.

Por eso, al preguntarme usted si me repugna... me he quedado indecisa. Esa cara... me ha costado bastante trabajo acostumbrarme a ella. Ni le llamo feo ni bonito: sólo que su cara... (Uc XIV: 118)

カルメンが口にするこうしたユダヤ人への本能的な嫌悪は、先に引用したデンドルの主張（注 15）を一見裏付けるかのようである。しかし、あくまでもこれは作者バルド＝バサンの反ユダヤ主義の表明ではない。作中人物カルメンの言表なのだ。

これを聴いた神父は、だとしたら結婚すべきではない、夫が生涯唯一の伴侶となることの意味を熟慮するようにと諭す。カルメンは次のように決意を表明する――

みずからに課す義務の遂行を断言することが自惚れにあたるとは思いません。[……] 魂にかけて申しますが、時を経て夫に背くなどという気持ちに心に浮かびましたら、むしろ何千回でも死ぬことを望みます。父であれ夫であれ神であれ、決して誰も私に不満を持つことはないでしょう。そのように私は生きて、満足して死んでゆくのです。他の生き方では、息が詰まってしまいます！ 承知の上で私は結婚します…… さまざまな事情で私は、こうした特別な状況に置かれているのですから。承知の上で、善人になります。前もって弁解したくありません。たとえこの世が陥没したとしても、善人であり続けます。creo que no es vanidad el asegurarle que he de cumplir con los deberes que me impongo. [...] Le digo con toda la verdad de mi alma, que si me figurase que había de faltar a él andando el tiempo, quisiera morirme seis mil veces antes. Ni mi padre, ni mi marido, ni Dios, han de tener nunca queja de mí. Así viviré... o moriré contenta. De otro modo... ¡me ahogaría! Me caso a sabiendas... las circunstancias me

ponen en esta situación especial... pues a sabiendas seré buena. No quiero disculpas anticipadas. Seré buena... ¡aunque se hunda el mundo! (Uc XIV: 120)

カルメンの発話の前で、サルスティオが「最後の部分がよく聴き取れたかどうか分からないのだが、花嫁がだいたいそのようなことを口にしたとわたしには思えた」“No sé si habré oído bien la última parte: se me figura que así, poco más o menos, dijo la novia” と断りを入れることから、読み手はカルメンの決意に確信を持ってない。ともかく、彼女がこう言ったと思ったサルスティオは興奮する——「この言葉を聴いたわたしは興奮して分別を失い、自分の危険なポジションを忘れてしまうほどだった」“estas palabras me volvieron loco de entusiasmo, hasta hacerme olvidar mi posición difícil” (Uc XIV: 120)。カルメンに喝采を送ろうと枝の上に立ち上がり、結果、安定を失ったサルスティオは枝葉の中、細枝に引っ掻かれながら地面まで落ちてしまう。地面に落ちた彼は、邸宅を抜け出し、浜辺にたどり着き、裸になる——「確実なアリバイだ。わたしは海水浴をしていたんだ」«Coartada segura... Yo estaba bañándome» (Uc XIV: 121)。

叔母の聖女化

悩まされ続けてきた疑問に解答を得た——カルメンは叔父のことを愛していない、父親のモラルにもとる行状から目を背けるために結婚しようとしていると知った——サルスティオはカルメンのことを、いきなり「天使」、「完璧なキリスト教徒の女」、「聖女」だと見なし始める。たとえば、友人ポルタルへの手紙のなかで——

わたしは彼女が女性の姿をした天使、それも熾天使だと確信した。カルミーニャが完璧なキリスト教徒の女の典型を体現していると司祭が断言

したことも充分納得できた。こうした女性には明らかに崇拜の念を抱かせる何か、神々しい何かが存している。彼女が聖女であることを疑い、そうでないと想像したのはわたしの過ちだった。彼女がいかに不幸で、どんな自己犠牲を強いられているか君が目にすることができたなら！
 me he convencido de que es un ángel, un serafín en figura de mujer. Con razón aseguraba el fraile que Carmiña realiza el tipo de la perfecta cristiana. Es indudable que en una mujer así hay algo que impone veneración, algo de celestial. Hice mal en dudarlo y en imaginar siguiera que no fuese una santa. ¡Y si vieses qué desgraciada, qué abnegación la suya! (Uc XV: 123)

サルスティオはこれまで以上にカルメンを愛する、それも「女性」というより、性別を超えた「天使」を崇拜するように愛するようになる——「理由は分からないが、(なぜ結婚するか) はっきりしてから、叔母のことをさらに愛する、それもはるかに洗練した形で、もはや女性としてなど関係なく、愛するようになった」“no sé si desde que veo claro quiero más a la tití, de un modo allá muy refinado, o si ya no me importa como mujer” (Uc XV: 124)。

第15章、結婚式後の舞踏会でワルツの演奏が始まると、「新郎の手が彼女に触れる前に自分が抱擁してやる」«La abrazaré antes que la hayan tocado los brazos de su novio» という思いに駆られ、誰よりも先にカルメンをダンスに誘う。サルスティオは自分の腕中に「地上でもっとも清純な聖なる女性」“la mujer más santa y pura de la tierra”を抱いていると想像し、ウェディング・ドレスの胸に飾られたオレンジの花のブーケをカルメンに強要する——「わたしに下さい。そうじゃないと馬鹿なことをしますよ」“Dámelo... Si no haré cualquier estupidez.” (Uc XV: 127-8)。

祝宴の喧噪のなか、サルスティオは「美德と義務を体現する新婦」“esa

recién casada, que personifica la virtud y el deber” の様子を観察し、果てしなく続く宴に疲労した顔を見せるカルメンに、悲しみを見出す——「わたしには悲しみだと、(婚姻の) 聖杯の苦みだと思えたのだった」“a mí se me figuraba que era tristeza, la amargura del cáliz” (*Uc XVI*: 133; 136)。

のぞき見

サルスティオは独り夜の浜辺で、自分がもしカルメンと結婚していたら今頃ふたりはどうしていたか、と空想をめぐらす。だが、カルメンが今夜純潔を失うにもかかわらず何もできないという自分の無力に思い至り、絶望する。寝室に戻る途中で隣の部屋に立ち寄ると、司祭見習い (Serafín) が床に這いつくばっている。そこで自分も跪いて司祭見習いが指さす隙間をのぞくと——「自分の眼が本当に新婚夫婦の部屋を見ていると確認したとき、わたしのなかの神経が引き攣った。本当だ、見える、見えるぞ! 何とすごい発見だ!」“Una crispación me contrajo los nervios al convencerme de que en efecto registraban mis ojos la cámara nupcial. ¡Era verdad, la veía, la veía! ¡Qué atroz descubrimiento!” (*Uc XVIII*: 151)。

サルスティオの視線は部屋をくまなく探索する。静寂のなか燃えさかる薔薇色のろうそく、飾られた薔薇の花々、めくられた白いシーツ、化粧台の白いレース…… 彼の空想はかき立てられ、不自然な姿勢によって頭に血が上ったのも合わさり、叫び出したい衝動に駆られる。すると、ドアが開き、「人がひとり、カルメン叔母さんが。神よ、叫び声を上げないよう、卒倒することのないよう力をお与えください。白いドレス、何時間も身に付けてしわになったドレスを着て、人をうっとりさせるように入ってきた」“una persona sola: tití Carmen... ¡Ay Dios! Fuerzas, fuerzas para no gritar, para no desfallecer... Con su traje blanco, ajado ya de tenerlo puesto tantas horas, venía hechicera” (*Uc XVIII*: 152)。視線はカルメンの挙動を詳述する。鏡の前に立ち、アクセサリーを外す。ヘアピンを取って髪をふりほだし、

その後、頬杖をつき深いため息を吐く。意を決したかのように立ちあがった瞬間——「ああ、見たくない、絶対に。寝室にひとりの男が人目を忍びながらも嬉しそうに、身を縮めて煮え切らない感じで入ってきた」「¡Ay! ¡No quiero ver, no quiero! Un hombre penetró en la cámara, furtivo, risueño, y al par acertado e irresoluto...” (Uc XVIII: 153)。

燭光に照らし出された叔父の顔を目にしたサルスティオは、脇で司祭見習いが覗いているのに気付く、涙しながら「見るんじゃない」「¡No, mirar no!”と言い立て、首を絞める。その上、立ち去る際には、覗いたりできないように司祭見習いをベッドに縛り付ける。自室に戻ったサルスティオは枕に顔を埋め、一切見聞きできないよう目と耳を両手で覆い眠れない夜を過ごす。夜が明けると、誰にも別れの挨拶をせず、実家に立ち帰ったのだった。

第19章、実家に逃げ帰ったサルスティオを友人ポルタルが訪ね、自分たちには「キリスト教徒の女」など相応しくない、何よりも自らの自由を重視する「現代の女性」を探すべきだと説得する。その際、カルメンについてサルスティオに次のように問いたです——「君が叔母さんにあると言う、そして感じ入っている美德とは一体どんなもので、何にもとづいているんだ？ 僕には否定的、非合理的かつ野蛮としか思えない。驚かないでくれよ、野蛮だと言ったんだ。嫌悪を感じる男と結婚し、彼に自動機械のように身を任せる、すべて何のためだって？ 他人の罪を自分の存在によって正当化しないためだって？」“¿Cuáles son y en qué consisten las virtudes que atribuyes a la tía y que tanto admiras? A mí me parecen negativas, irracionales, brutales. No te asustes, brutales he dicho. ¿Casarse con un hombre repulsivo, entregársele como un autómatas, y todo por qué? ¿Por no autorizar con su presencia los pecados ajenos?” (Uc XIX: 158)。

父親の不品行をとがめるために、愛してもいない男と結婚するカルメンの決意は、「否定的、非合理的かつ野蛮」だと主張する友人に、サルスティオは「自己犠牲」の行為だ、叔母は「天使」、完璧なキリスト教徒の女、「聖

女」なのだと言い張る。読者は、カルメンが「聖女」だというイメージ生成に、——叔父に対して醜悪な男というイメージを作り上げたのと同じ——サルスティオの想像力が能動的に係わっていることに気付くだろう。自ら——「カルメンへのロマン主義的情熱は叔父に対する永遠の偏見が他の形を取ったにすぎない」“Mi entusiasmo romántico por ella no es más que la eterna prevención contra él, que adquiere otra forma” (*Uc* XVIII: 150)と——漏らすように、叔父への憎悪が、その人物との共生を甘んじて受け入れた叔母を「殉教者」として聖人化させているのだ¹⁹⁾。

ポルタルの説得で考え直したサルスティオは、実家を訪れたモレーノ神父に、いったんは次のように伝え安心させる——「あの妄想は消えてしまった。感情の高まりは静まった」“Aquellos delirios pasaron. Se ha deshinchado el énfasis sentimental” (*Uc* XIX: 162)。

叔母に愛されている

第20章、休暇が終わりマドリードに戻ったサルスティオは、節約のため叔父夫婦の新居に住まわせられる。カルメンを一目見た瞬間、想いが再燃し、彼女を観察する。そして、結婚したカルメンの表情や体型から「彼女は幸福ではない」“¡No era feliz!” という結論を引き出す (*Uc* XX: 167)。ポルタルは叔母に未練のある素振りを見せるサルスティオを叱責する。それに対して、サルスティオは——

あんなに善良な女性が自分のことを愛してくれるなら、分かるかい、本当に幸福だと感じることだろう。自分は愛されることを求めるだけ。愛されていると確信できたなら、彼女のもとを離れ北極へでも行ってもいい。それだけを待ち望みながら、それゆえに生きているんだ。Lo que comprendo es que sería feliz ¿entiendes?, completamente feliz, si me quisiese esa mujer tan buena. Que me quiera. No pido más. Me

apartaré de ella, me iré al polo Norte, pero seguro de que me quiere.
A eso aguardo y por eso vivo. (Uc XX: 173)

自分への愛を確認しようと、サルスティオは叔母を観察し、自分たちふたりが叔父に対して抱く嫌悪について分析する。そして、さらなる共感を覚える――

それは憎しみではない。憎しみには理由があり、根拠にもとづいて論理的に考え、正当化できるものだ。たしかにわたし自身叔父を憎んでいると言ったことがあるが、それは不適切で正確さに欠ける表現だった。叔父に対してその妻とわたしが感じていたのは憎しみではなかった。克服することがより難しい、深刻な拒絶だったのだ。No es odio. El odio tiene porqué, se funda en motivos, se razona y se justifica: y si a veces me he dejado decir que yo odiaba a mi tío, me he expresado mal, con poca exactitud. No era odio lo que sentíamos hacia él su mujer y yo, sino algo menos vencible: repulsión profunda. (Uc XXI: 182)

そして、「不幸な結婚」“mal maridaje”によって生じた、本能に根付く「拒絶」の症状をカルメンの、叔父と話すときの声色や就寝をなるべく遅らせようとする試みなどに見出し、ひとり悦に入る。

母からカルメンの父親と小娘（Candidiña）が密かに結婚したという知らせを受けたサルスティオが、叔母にそれを伝えると、彼女は肩の荷が下りた様子で神の恩寵を讃える。サルスティオはこの機に乗り、彼女を見つめながら「恩寵は愛し合うことにもとづくのですね」“La gracia consiste en quererse”とささやく。反応しない叔母に、夫婦は何らかの愛情を示す、少なくとも嫌悪し合ったりしないものですよねと、さらにたたみ掛ける。

しかし、折悪く叔父が帰宅し、義父と小娘の婚姻の知らせに声を荒げ、義父は気が狂ったに違いない、婚姻を無効にしてやると息巻く。スキャンダルな内縁関係よりましでしょうと反論したカルメンに、召使いと結婚するなど問題外だ、何も分からない女は黙っていると命じる。サルスティオは叔父の言動を非難し、カルメンを慰めようとするが、彼女は気丈で、夫に反論すべきではなかったと反省する。サルスティオが居室のカーテンを見つめていると、そのドレープが修道僧の服に、そこにモレーノ神父の顔が見えてくる。そのカーテンにサルスティオは言い挑む——「叔母が深奥の感情に強いている、英雄的な自己犠牲が際限なく続くはずがない。今にバネが弾けるはずだ」
 “esta abnegación heroica y esta fuerza que hace mi tía a sus sentimientos más profundos no pueden llegar hasta un límite indefinido. Ya vendrá ocasión en que salte el resorte...” (Uc XXI: 189)。

『あるキリスト教徒の女』の最終章、サルスティオは下宿仲間に誘われ、王立劇場へオペラを観劇に行く。その帰りに当たった寒風のため、翌朝から熱を出し寝込んでしまう。40度近い熱にうなされ妄想するサルスティオを、叔母はやさしく看病してくれる。その時——

発熱による無意識の動きのなかで、わたしは（カルメンの）頸に腕を回そうとした。すると、それは精神の錯乱だったのか。あの力強い、揺るぎない女性は、わたしから逃れようとするどころか、わたしに愛のこもった反応を返してくれた。誓ってもいいが、彼女の瞳はわたしを優しく甘く見つめ、彼女の両手は子供に対するようにわたしを愛撫し喜ばせてくれ、彼女の口は心の音楽のような響きで甘い言葉をささやいてくれたのだ。cuando en un movimiento involuntario hijo de la fiebre se me ocurrió echarle los brazos al cuello... pensé... ¿era desvarío? que aquella mujer fuerte, inquebrantable, lejos de hacer el menor movimiento para apartarse de mí, me devolvía la afectuosa

demostración. Yo juraría que sus ojos me miraban tiernos y dulces; que sus manos me acariciaban y halagaban como se halaga y acaricia a un niño; que su boca murmuraba frases de miel, cuyo sonido era una música del corazón... (Uc XXII: 195)

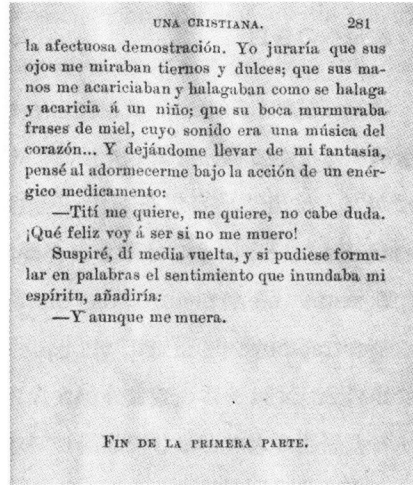


fig. 6 Uc 初版 281 ページ

出典：E. Pardo Bazán, *Una cristiana*, Madrid: La España Editorial, sin año.

この前篇末で、サルスティオはカルメンに愛されていることを確信する——「わたしは幻想に引きずられる

まま、強い薬の効力でうとうとしながら思った。『叔母はわたしを愛している、疑いなく愛してくれている。もし死なないなら、これからわたしはどんなに幸せになることか！』“Y dejándome llevar de mi fantasía, pensé al adormecerme bajo la acción de un enérgico medicamento: —Tití me quiere, me quiere, no cabe duda. ¡Qué feliz voy a ser si no me muero!” (Uc XXII: 195, fig. 6)。最後、満足感に一息つき、「たとえ今死んだとしても」“Y aunque me muera”と言い直す。

カルメンは「わたし」が「愛されている」と確信するような行動を実際に取ったのか、それとも、高熱によるサルスティオの「精神の錯乱」、あるいは強力な解熱剤の効力なのか。これは読者の解釈に任されることになる。どちらにせよ、サルスティオが「相手に愛されている」「相手も自分を愛している」という被愛妄想（エロトマニア）をもっていることは明らかである²⁰⁾。

叔母への告白

後篇『試練』第1章、サルスティオは見舞いに訪れたポルタルに、叔母が看病するなかで自分に優しく接してくれ、抱擁を許してくれたと自慢する。だが友人は当然、妄想を疑う——「実際のところ叔母さんの反応を夢見たわけじゃないというのは確かなのか？ たわいなく幻想を抱くからな！」“¿Y estás bien seguro de que efectivamente no has soñado las demostraciones de la tití? ¡Porque es tan fácil ilusionarse!” (Lp I: 203)。サルスティオは一体いつ自分がカルメンについて幻想を抱いたのか、と反論する。周囲の人がどんなに説得しても決して訂正されることのない、エロトマニアの典型的症状である。

話は叔父フェリペに及ぶ。叔父は義父の結婚以来、カルメンにとってより忌み嫌うべき存在となり、夫婦の関係も最悪になったと力説するサルスティオを、再びポルタルがたしなめる——「叔父夫婦の話となると、おまえは大変な心理的なもつれを引き合いに出してくるから、おまえが話すと、少なくとも見たところ何も起きていない夫婦に、秘められた複雑なドラマが存在するように聞こえてしまう」“en la historia de tus tíos noto que armas unos embrollos psicológicos tales, que no ocurriendo nada en ese matrimonio, al menos exteriormente, cuando hablas tú parece que existe un drama interior complicadísimo.” (Lp II: 214)。

サルスティオは友人に、叔母の叔父への嫌悪は疑いない、「叔母が叔父を嫌悪することを糧に生きている」“Vivo de que le aborrezca”と自分の歪んだ嗜好を明らかにする。カルメンと共感し合う関係に悦楽を覚えているのだ——「力強い女性と自分とのあいだに感情の相関関係があることにわたしは満足している。ある人物が自分に嫌悪感を抱かせ、同じく彼女にも嫌悪を感じさせる。わたしが憎むものを、彼女も憎む。わたしのことを愛してくれないかもしれないが、彼女の感情がわたしのリズムに合わせて変わること

を誰にも阻むことはできない」“Estoy satisfecho con que medie cierto paralelismo de sentimientos entre la mujer fuerte y yo. Si a mí me inspira repugnancia una persona, repugnancia le inspira a ella; lo que yo odio, ella lo odia: podrá no quererme a mí, pero nadie quita que sus afectos van al compás de los míos.” (*Lp* II: 218)。

第3章、サルスティオはみずから政治集会に出て頭を冷やそうと試みるが、効き目はない。第4章、叔父と同じ建物に住む、亡夫が官僚をしていた亡亡人一家の集いに、カルメン共々招かれるなどして、叔母と一緒に過ごす機会が増える。サルスティオはとにかく、叔父夫婦を観察する——「繰り返すが、わたしは絶えず叔父を観察し続けた。他のことは何もしなかった。一見ボツとして見えるように見えても、常にわたしの心情的生活の焦点と中心はカルミーニャとその夫だった」“Repito que le observaba sin cesar. No me ocupaba en otra cosa; aunque en apariencia me distrajese, volvía siempre al foco o centro de mi vida sentimental, que eran Carmiña y su marido” (*Lp* IV: 239)。このように「ふたつの魂の解剖学者」“anatómico de dos almas”を自認するサルスティオは、スパイ活動に励む——「叔母へのわたしの狂おしい情熱の物語はスパイ活動に尽きる」“La historia de mi loca pasión por la tití podía reducirse a un espionaje” (*Lp* IV: 239)。

叔父が妻にまったく無関心であることを確認した上で、カルメンが自分との会話を楽しんでくれている現状に留まるか、もう一步踏み出すか、サルスティオは迷う——「すでに手にしたものゝをわたしの突飛な行動が台無しにしてしまうのを怖れていた。叔母から断絶、処罰、追放を宣告される危険を冒すよりも、甘い親密さを享受するほうが価値があるのではないか。ひとまず落ち着け」“Tenía miedo, mucho miedo a que un desplante mío malograra lo obtenido ya: ¿no valía más gozar tan dulce intimidad que exponerme a una ruptura, un castigo, un extrañamiento impuesto por la tití? Calma...” (*Lp* IV: 242-3)。

ところが、カルメンが内輪話をしてくれているときに、「彼女の聖なる口元にキスの雨を降らせたことだろう」「me hubiera comido a besos su sagrada boca」というほど感情が高まる。そして——「本題に入る好機を見つけた。『さあ、叔母さん、告白しなさい、配偶者と一緒にいてそれほど幸せじゃありませんよね』。」「Vi favorable coyuntura para entrar en materia y dije: —Vamos, tití, confiesa que no eres allá muy dichosa con tu cónyuge.” (*Lp* IV: 245)。

サルスティオの判断どおり、それは「好機」だったのか？ 第5章冒頭、カルメンはそうした質問を予測していたかのように——『私が幸せでない理由は何ですか？』と、両頬に澄んだ紅色を浮かべながら答えた。『幸福とは（こうした言い方を笑わないでください）私たち自身の内面にあるのです。自らの義務を喜んで果たす者は幸せなのです。否定できないでしょう』“—¿Y por qué no he de ser dichosa? —contestó dejando asomar a sus mejillas un carmín puro—. La dicha (no te rías de estos términos) está en nosotros mismos. El que cumple con su obligación y lo hace de buena gana, es feliz. ¿A que no me lo niegas?” (*Lp* V: 247)。

サルスティオは女性が目的とすべきは愛と母性であるのに、あなたは愛してもいないし子供もいないと反論するが、私たち人間は神の意思に随うだけだと言ってカルメンは立ち去ってしまう。すなわち、サルスティオは判断を見誤ったのだ。

幸せかどうか疑われたカルメンは、逆に、化粧や衣装に配慮し夫の気を惹こうと努めるようになる。叔父はまったく関心を示さないが、その様子を目撃したサルスティオは激昂し、カルメンを絞め殺そうという想いさえ抱く——

だからといって、わたしが大した唾を飲み込まなかったわけでも、苦虫をかまなかったわけでもない。聖女が女で、その女が他の男に身を献げようとしていると見なしたわたしは、聖女よ、女傑よ、と呼びながら彼

女の足下に口づけをし、彼女を絞め殺してしまっただろう。Mas no por eso tragué menos saliva, ni masqué menos hieles. Yo hubiera besado sus pies llamándola santa y heroína... y la hubiera estrangulado, considerando que la santa era una mujer, y que esta mujer se brindaba a otro hombre. (*Lp* V: 249)

ストーキング

第6章、妻にこれまで無関心だった叔父が突然、熱烈な愛情を示し始める。食事や散歩の際、カルメンに優しく接し話しかける。そして、ギラギラした目で妻を見つめながら、彼女をともなって早々と寝室に引き上げる。その様子を見たサルスティオは、自室に駆け込む——「わたしは試みた、勉強に没頭し、新聞を読み、小説に目を通そうと。だが、不可能だ！ 激怒と悲痛に唸りながら明かりを消し、部屋に鍵を掛け、ベッドに突っ伏した」“Traté de enfrascarme en el estudio, de leer periódicos, de hojear una novela... ¡Imposible! Rugiendo de ira y de pena, apagué la luz, me encerré con llave y me tumbé sobre la cama.” (*Lp* VI: 259)。

第7章、叔父の変貌ぶりに、サルスティオは気が狂ったのではと期待する——「叔父がもし気がふれたのなら、離婚したのと同じ結果になる。生きていようといまいと、狂人は彼女と一緒にいることはできないのだから、絆は壊れ、彼女はこの世に独りになる」“Si mi tío se trastorna, el resultado será igual que si se divorciase. El lazo roto queda, y ella sola en el mundo, porque un loco no acompaña, ni presente ni ausente.” (*Lp* VII: 262)。

気晴らしに『ハムレット』を手に取り、デンマーク王子の道徳的興奮と行動の優柔不断さに自分の心情を重ね合わせ読み進めていると、「変わった一節」がサルスティオの心に響く——「次の夫に抱かれることは、亡くした夫を二度殺すことになります」«Cuando acaricio a mi segundo esposo, mato

segunda vez al primero» (*Lp* VII: 263)。『ハムレット』第3幕第2場の劇中王妃の科白を、サルスティオは、美德の女性であればあるほど、その女を愛する男は宿命的に、彼女の夫の死を願うものだと理解する。結果、次のように叔父の死を妄想する日々を送る——「独り机に肘をつき、熱っぽい掌に額をあずけながら、わたしは飽きるまで不吉な夢を見た。叔父が目を閉じ手を組んで棺に横たわっているのを想像するという、忌まわしい悦楽に浸っていた」“A solas, con los codos en la mesa y la frente sostenida entre mis palmas febriles, yo me saciaba del sueño fúnebre, y me entregaba al detestable goce de figurarme a mi tío extendido en el féretro, con los ojos cerrados y las manos cruzadas.” (*Lp* VII: 263)。

第8章、夫が示す愛情に、カルメンが自分以上に苦しんでいると考え、健康を案じたサルスティオは、ある朝、教会に出掛ける彼女の後を付ける——「授業をサボり、すべてを捨て去って（授業なんか構わない！ まったく問題じゃない！）、曲がり角に立ち、カルメンが出掛けるのを待った。彼女が祈禱書を手に出てくるのが見えた」“Dejando clases y dejándolo todo (¡qué me importaban las clases! ¡qué me importaba cosa alguna!), me aposté en la esquina para aguardar a que saliese Carmen. La vi aparecer, devocionario en mano” (*Lp* VIII: 271)。

サルスティオは、(当時のマドリード市街図〔fig. 7〕で実際に経路をたどることができるほど詳細に) その都度、街路を確認し、何故ここで曲がらないのか、ここに教会があるのか、と自問しながら叔母の後を付けて行く²¹⁾。パティソンの指摘どおり、この章は「(殺人事件のない) 探偵小説の性格」を帯びてくる²²⁾。彼女はなぜか、追跡するのに苦勞するほど早足で歩を進める——「まるで自分自身から、あるいは誰か追跡者から逃げるかのような速さで駆けていた。わたしからではない。私は見られていないし、気付いたとしても決してわたしを避けることはないはずだ。すくなくともわたしは心中こう確信していた」“Corría lo mismo que si huyese de sí propia, o de

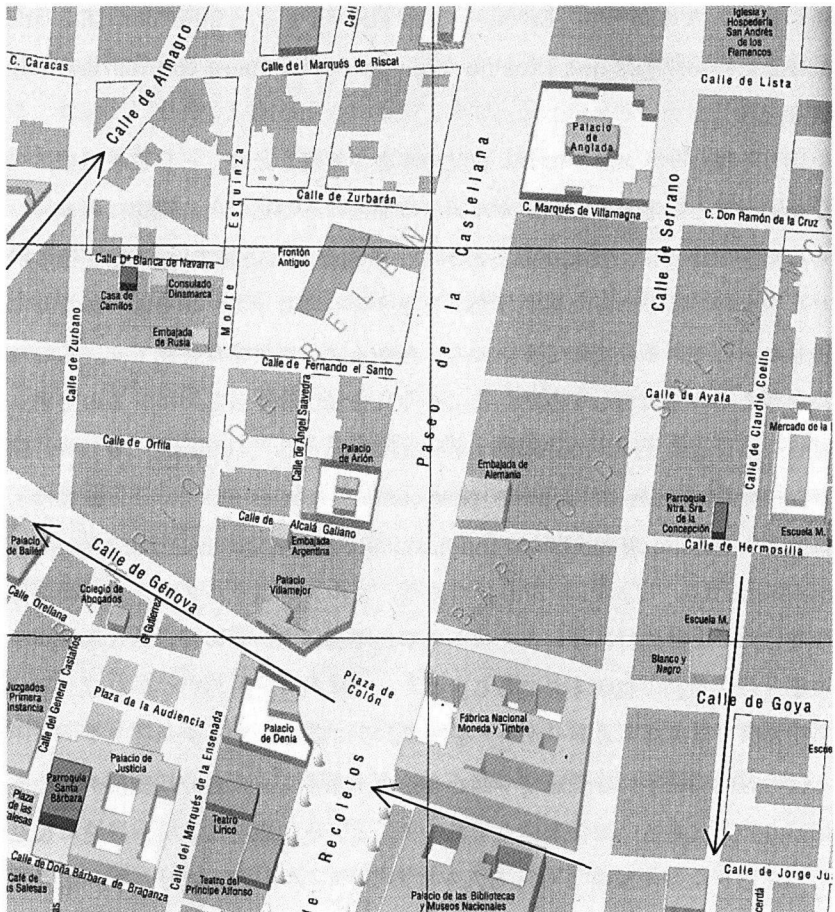


fig. 7 マドリード市街図 1898 年

出典：V. Pinto Crespo, ed., *Madrid 1898: una guía urbana*,
Madrid: La Librería, 1998, p. 82.

algún perseguidor. No de mí; ni me había visto, ni me evitaría aunque me viese: al menos tal era mi convicción íntima.” (Lp VIII: 272)。カルメンは結局、どの教会にも足を踏み入れることなく、帰宅してしまう。サルスティオは、その理由をあれこれ思いめぐらす——「自分の考えを神に相談する勇気が持てないのだろうか？ 神にはもはや彼女を慰める力さえない

ということなのか？」“¿Es que no se atrevía a consultar con Dios sus pensamientos? ¿Es que Dios no tenía ya fuerzas para consolarla?” (*Lp* VIII: 272)。

同日午後、サルスティオは、叔父の不在を確認した後、一旦家を出て、15分後にそっと帰宅する。彼がカルメンの部屋に忍び込むと、視線に引き付けられたかのように、彼女が立ちあがり、断固とした口調で——「私を待ち伏せし後を付けるといった馬鹿げたことをするものじゃありません。あなたは善意からしているのでしょうか。でも、分かるように異常な行動です。私のためと考えているのでしょうか、とにかく私を傷つけ、苦しめているのです」“Que no hagas estas tonterías de acecharme y de seguirme. Tú llevarás la mejor intención del mundo; pero confiesa que es una conducta rara... y, sobre todo, que me haces mucho daño, creyendo hacerme bien; que me angustias.” (*Lp* VIII: 273)。つまり、カルメンはサルスティオが後を付けていたことに気付いていた。彼から早足で逃げていたのだ。またもや、語り手「わたし」の判断ミスである。

精神医の福島は「ストーカー」を次のように定義している——「ストーカーとは一方的に相手に恋愛感情や関心を抱き、相手もまた自分に愛情や関心を抱いている（あるいは将来抱くであろう）という幻想をもって、異性に接近して迷惑や攻撃や被害を与える人々である」^[23]。カルメンに対して、被愛妄想を抱き、彼女を“stalk”「後をそっと付ける」^[24]、そして、彼女に「迷惑」を与えるサルスティオはまさに「ストーカー」である。福島が「ストーキングは都市に典型的な犯罪」^[25]だと指摘するように、サルスティオは首都マドリッドを舞台にストーキングをおこなっているのだ。

マゾヒズム

カルメンの訴えにサルスティオは一切怯まない——「わたしが示す関心をあなたが邪魔に思うことはないし、それは正しい道でもありません。逆に、

あなたを喜ばせ慰める唯一のものなのです。哀れな殉教者よ、あなたを慰め喜ばせるものだからこそ、正しくも、あなたはこうした無意味な埋め合わせに、ためらいを見せ、断ろうとするのですね。分かります、分かりますよ。わたしは気付いています」“Ni te molesta el interés que te demuestro, ni ése es el camino. Al contrario, te agrada: es lo único que te consuela. Y como te consuela y te agrada, pobre mártir, por eso, cabalmente por eso, tienes escrúpulos de una compensación tan insignificante, y has determinado privarte de ella. Lo sé, lo sé, lo adivino...” (*Lp VIII*: 273)。

カルメンは決然と、殴りかかるかのように否定する——「慰めも、埋め合わせも、そんなものは何もあります。私を殉教者と呼ぶのさえ馬鹿げたロマン主義です」“Ni hay tal alivio, ni tal compensación, ni absolutamente nada de eso. El llamarme mártir es un romanticismo bobo.” (*Lp VIII*: 273)。

眼に涙を溜め訴えるカルメンに、サルスティオは彼女の見せる怒りこそが口にした言葉への反証だと理解し、まったく動じない——「あなたの人生が殉難の日々であることを否定しないでください。わたしはあなたを見張りたいという思いから、あなたに起きていることをあなた以上に周知しています。日々あなたの後を付けていたのですから。[……] カルメン！ カルメン！ 他の人は騙せても、わたしは無理ですよ。あなたは殉教者であるだけでなく、聖女です、聖人なんです」“No me niegues que tu vida es un martirio... Mira que yo, con esta manía de acecharte, sé mejor que tú misma lo que te pasa. Te he seguido día por día. [...] ¡Carmen, Carmen! A otros engañarás, a mí no. No sólo eres mártir, sino que eres santa, y a los santos...” (*Lp VIII*: 273-4)。サルスティオは「ある朝」だけでなく、日々カルメンを「見張る、待ち伏せする」“acechar”していたわけである。

わたしは言葉を行動で終わらせた。屈み込み、叔母のガウンの可能など

ころをつかみ寄せると、ガウンにキスをした。彼女は乱暴に後ずさりし、涙を散らしながら叫んだ。「こんなことをもう一度言ったりしたりしたなら、私が家をでるか、夫に言ってあなたを追い出してもらいますから」。

Completé la frase con la acción; me incliné, y cogiendo a bulto, por donde pude, la bata de mi tía, la besé. Ella se echó atrás con violencia, y gritó saltándosele las lágrimas:—Como vuelvas a decir ni a hacer bobadas así... o me voy de casa, o digo a mi marido que te ponga en la calle. (*Lp* VIII: 274)

サルスティオはまさに「聖女」に接するかのようになり、カルメンの衣服に口づけをする。そして、カルメンの叱責を意に介さない——「あなたは嫌悪する男と一緒に [……], あなたが好感をもつ男から遠ざかろうというのですか」“Y tú te juntas al que aborreces [...], y tú te alejas del que... te es simpático...” (*Lp* VIII: 275)。カルメンは、聖女が何たるかも知らずに自分を聖女だと言い張るサルスティオを笑ってしまうと、彼を嘲る。すると、サルスティオは「自分の内部に革命を感じた。その瞬間たとえ天上の栄光を提示されたとしても自制したりはしない」“Sentí una revolución en mi ser. No me reprimo en aquel instante si me ofrecen la gloria.” (*Lp* VIII: 275)——と、本能に促されるまま、さらに言い立てる——「聖女よ！ あなたにだって誘惑という栄冠があってもいいじゃないですか」“¡Santa, santiaña! También para ti hay tentación y corona...” (*Lp* VIII: 276)。恐れを感じたカルメンが口をつぐみ振り返ったとき——「彼女がそうしていた一瞬、わたしはその機を利用し再度彼女の服をつかみ（手を握ることはできなかった）、そこに激しく口づけをした。彼女が体に噛み付かれたかのような叫び声を上げるほど激しく」“Así permaneció un momento, que yo aproveché para asir otra vez su vestido (no me atreví a las manos) y besarlo con tal unción, que ella gritó como si la mordiese en su carne” (*Lp* VIII: 276)。

カルメンはあなたが出て行かないなら、窓から顔を出して叫び声を上げますと警告し——「自分を守れない人に手出しすることが大変卑怯な振る舞いだと分からないのですか？ 卑怯者！」“No comprendes que es una cobardía muy grande meterse con quien no tiene defensa?... ¡Cobarde!” (*Lp* VIII: 276)。「卑怯者」と罵られたサルスティオは——

わたしの血，頭，心は猛り狂ったクレーターだった。何も返事をしなかった。ただし，黙ったおかげでかえて力が出て，彼女の服をつかみ，彼女の両手を甘美な乱暴さで奪い取った。その両手に自分の焼けるような両頬と両眼をあてがい，自分の額を擦り付けた。筆舌に尽くしがたい幸福を味わいつつ，言葉にならない音を口ごもった。mi sangre, mi cabeza, mi corazón, eran cráteres furiosos. No contesté, pero mi mismo silencio me dio fuerzas para sujetarla por la ropa y cogerla con dulce violencia las manecitas contra las cuales apoyé mis mejillas ardorosas y mis ojos y restregué la frente sintiendo felicidad indecible, balbuciendo sílabas que pretendían, sin conseguirlo, formar palabras. (*Lp* VIII: 276)

この日の午前中，サルスティオはカルメンをストーキングし，午後，人妻の叔母に決して許されない，常軌を逸した暴行を3度犯したことになる。なぜ3度も犯したのか。自分がそうすることでカルメンが幸せを感じていると信じ込んでいるからである。たとえば，この3度目の暴行後——「その後わたしは顔を上げ，彼女の細い手首を放さないまま，幸福に酔いしれ微笑みつつ，カルミーニャを見つめた」“Levanté después la cara y miré a Carmiña sonriendo, enajenado de ventura, sin soltar sus delgadas muñecas.” (*Lp* VIII: 276)。強烈なエロトマニアのため，サルスティオには暴行を犯したという意識がまったくない。

彼女の顔にわたしのと同じ輝くような微笑が広がる一瞬があった。しかし、長くは続かず、激しい恐怖の表情がすぐさまそれに取って代わった。彼女は腹を立てることも怒ることもなく、哀願するような口調で声を上げた。「お願いだから放してください。着替えてバリエントス家に下りなければいけませんから」。Hubo un momento en que por el rostro de ella se esparció otra sonrisa tan luminosa como la mía; pero duró muy poco, reemplazándola una expresión de terror vivísima. Sin enfado, sin cólera, en tono suplicante, exclamó:

—Déjame, por Dios. Tengo que arreglarme y bajar a casa de Barrientos. (*Lp* VIII: 276-7)

カルメンが本当に「微笑」を浮かべたのか、サルスティオの妄想にすぎないのか、読者には分からない。とにかく、彼女がサルスティオから逃れたいと思っていることは確信できる。バリエントス家の面々が散歩に出掛けたことを知っていたサルスティオは、カルメンが口実を使って自分から逃げようとしていることに気付く。部屋の中を歩き回りながら——「わたしは笑うと同時に泣いていた。長らく疑っていた事実を確信し気が動転していた」“Reía y lloraba a un tiempo. El convencimiento de la realidad tanto tiempo sospechada me aturdió” (*Lp* VIII: 277)。サルスティオが確信した「長らく疑っていた事実」とは何か？ 読者は、サルスティオがやっとカルメンに愛されていないことに気付いたにちがいないと考えるだろう。しかし、サルスティオの心理はここでも歪みを見せる——

わたしにとって幸福の明示であったことが、彼女にとって罪を発見したおののきだったのだ。その強い女は、今、わたしが単に愛くるしく元気な甥、感じのよい家族の一員ではなく、「男」——物質が形状を望むように女が欲する存在——として、彼女の感情の領域に他の男がリアルに存

在しない以上、他ならぬこの世でただひとりの「男」としてわたしを見ていたのだ。自分の魂が、夫の腕の中に生命のない肉体だけを残し、その腕を逃れ、自分でも気付かないまま、高潔な意思の許可も得ないまま、他の魂、すなわちわたしの魂を求めていることを理解したのだ。Lo que para mí era revelación de ventura, constituía para ella el espanto del descubrimiento de un crimen. Ahora veía la mujer fuerte que yo no era meramente el sobrinito cariñoso y animado, la cara simpática de la familia, sino el *hombre* —aquel ser que la mujer apetece como la materia apetece la forma— el único *hombre* del mundo, porque los demás no tenían existencia real en la esfera del sentimiento... Ahora comprendía que su alma, al huir de los brazos conyugales, donde sólo quedaba el cuerpo inerte, se iba en busca de otra alma, la mía, sin saberlo, y sin permiso de la honrada voluntad. (*Lp* VIII: 277)

サルスティオは理解した——叔母がやっと自分のことを「男」として愛していることに気付いてくれた、だからこそ、「聖女」であるカルメンは「罪」の意識に苦しんでいる。叔母が今朝教会に足を踏み入れなかったのも、最近痩せてしまったのも、ナーバスで興奮した様子を見せていたのも、これが原因だったのか、と納得する——「興奮しながらわたしはこうしたことすべてを悟った」“En medio de mi alteración adiviné todo esto.” (*Lp* VIII: 277)。

章末、サルスティオは、叔母を苦しめないために、叔父宅を出ることを宣言する——「カルミーニャ、わたしは立ち去ります。家を出ます。わたしのせいであなたが僅かでも不快に思って欲しくありません。これ以上何も尋ねません。知りたかったことがすべて分かったからです。これからもう待ち伏せしたりしませんし、わたしはあなたにとっての弟のようになります」“Carmiña, ya me voy... Salgo de casa. No quiero que tengas por mí ni un

minuto de contrariedad. No te pregunto nada. Sé cuanto me importaba saber. Ahora no te acecho más. Soy para ti como un hermano...” (*Lp* VIII: 277-8)。

この間、カルメンは愛しているなど一言も発していない。このことから読者は、サルスティオが気付いたというカルメンの愛が彼の思い込みにならなと理解する。サルスティオが部屋から立ち去るのを見つめる彼女の視線からも、とにかく事態が収拾したことをホッとする様子が確認できるからだ——「彼女の視線は和らぎ、光を放ち始めた」“su mirada fue calmándose y destellando luz.” (*Lp* VIII: 278)。

サルスティオは、以上のように、カルメンから拒絶されればされるほど興奮し、被愛妄想が悪化、より過激な行動を取る。こうした行動に、サンティアネス＝ティオは「隠されたマゾヒズム」²⁶⁾を指摘する。マジョラルが *Uc-Lp* 全篇に看取するところの、「病的で、捻れた抑圧された官能性の雰囲気」²⁷⁾も、主人公の自虐的心理に因るものだろう。サルスティオは妄想を抱くが、妄想以外の点ではまったく正常者と変わらない能力を保持している。こうした心理的状态から、今日の精神医なら、「パラノイド系」のストーカーだと診断するかもしれない²⁸⁾。

待ち伏せ

第9章、サルスティオはマドリードの病院 (San Carlos, fig. 8) に入院したモレーノ神父を見舞う。そこで、カルメンから彼の振る舞いを聴いていた神父に諫められると、逆に、愛し合っていないふたりを結婚させたあなたに責任があると反論する。結局、サルスティオは、カルメンが不幸なはずはない、それより世話になっている人の家で、その妻の名誉を傷つける行動に出るのは紳士として恥すべきではないかとたしなめられ、家を出ることを誓い、この戦いにおける自分の勝利を宣言して神父と訣別する。

第10章、ストーキングした日以後、叔母が注意深く自分を避けるのは、

彼女の胸中における秘かな葛藤のせいだと解釈しながらも、サルスティオは我慢できなくなりカルメンを待ち伏せする——「一瞬でも叔母とふたりだけで言葉を交わすには、病院へ出入りする際に彼女を捉まえるのが一番だ。だからそうやった」“para hablar un momento a solas con la tití, lo mejor era esperarla a la entrada o a la salida del hospital. Así lo hice.” (Lp X: 293)。先ほどの場面で叔母に、「もう待ち伏せはしない」と誓ったにもかかわらず、である。サルスティオがいかに信頼できない作中人物であるか明らか

だろう——「わたしを目にしたとき驚いた様子を見せた。絹レースのベール越しに生き生きした表情が彼女の顔に広がるのを確認できた。『こんにちは。こんなところでどうしたのです、サルスティオ？』と彼女はとぼけたように尋ねた。『神父さまのお見舞いに來たのでしょうか。さあ、一緒に入りましょう』“Sorprendióse al verme, y al través del velo de blonda pude notar el vivo color que se extendió por su rostro. —Hola... ¿Tú por aquí, Salustio? —me preguntó disimulando—. ¿Vienes a ver al Padre? Sube, que entraremos juntos.” (Lp X: 293)。

普通を装うカルメンに、サルスティオはいつも家で自分を避けてばかりいるから、こんな場所を選んで話に來たと告げ、とまどう彼女を街角に誘う²⁹⁾——

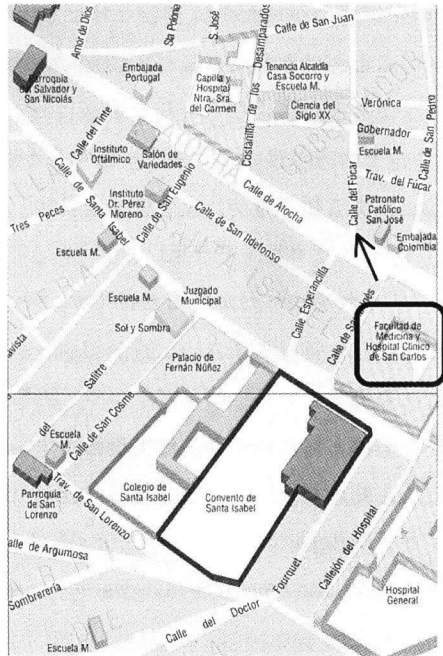


fig. 8 マドリード市街図 1898 年

出典：Ibid, p. 97.

「伝えたかったのは」と、わたしは努めて冷静に、しかし動揺を抑えることができず口にした。「あなたの家から出て行きます。[……] これ以上あそこにいたくありません」

「その方が良いでしょう。私もそう思っていました」

「(出て行く方が) 良いですよ?」

「そうですね、そう思います」

「それを知りたかっただけです。それだけです。さあ、サン・カルロス病院に行ってください。誰かが通りかかって、私たちがここにいるのを見られたら…… 行って。いや、その前に一言だけ聴いてください。わたしはあなたの家から出て行きます。でもあなたから離れませんよ。いつも絶えず一緒にいますから。分かりましたか?」

—Quiero decirte —pronuncié tratando de hablar con aplomo y no sabiendo reprimir la agitación— que me voy de tu casa.[...] Pero no quiero estar más allí.

—Tú... Pues haces bien... Ya me lo esperaba.

—¿Hago bien, verdad?

—Sí... Yo creo que sí.

—Eso quería saber... Nada más. Ahora... vuélvete a San Carlos. Si pasa alguno y nos ve aquí... Vuélvete. No: antes escucha otra palabrita. Me voy de tu casa, pero no me aparto de ti. Contigo estoy siempre, a todas horas. ¿Me has entendido? (*Lp* X: 293-4)

引用前半が一見して内容のない言葉のやりとりであることが分かるだろう。サルスティオはすでにカルメンに直接、家を出て行くことを宣言している。にもかかわらず、カルメンにそれを繰り返し、同意を求めている(読者には叔母がそれを望まないはずがないのは明らかなのだが)。これを言うためだけに街角で待ち伏せしていたのだ。また、会話には、前に引用した第8章末

で弟のように振る舞うと誓ったとおりの、サルスティオの従順な姿勢も見て取れる。ただし、最後の台詞の途中で、いきなり、サルスティオのトーンが変化するの分かるだろう。「あなたから離れない」、「たえず一緒にいる」とまさにストーカー的発言をし、「分かりましたか？」と脅しをかけている。不快に思わせるようなことはしない、待ち伏せなどしないと一度は誓ったサルスティオが、またもや変貌を見せている。

絹のレース編みの向こうで、彼女がまばたきをし、顔色を変え、何か答えようとし、できないでいるのが見えた。[……] しかし、話す代わりに、彼女はわたしに手を差し伸べ、それをつかんだわたしは、両手でもみくちゃんにした。ああ、神よ！ 彼女の手を放すことはできなかった。愛されているという証拠が、自分にとってあまりにも決定的で心地よかったため、わたしは完全に安心してしまっていたのだ。[……] わたしたちふたりはこのように気が動転し、彼女は自分の手を引き離すことなく、わたしは彼女の手を放さないままだった。Por detrás del enrejado de blonda la vi parpadear, demudarse, querer contestar algo y no poder... [...] Mas, en vez de hablar, alargóme la mano, que cogí y deshice entre las mías. ¡Ay, Dios! no sabía soltarla... La evidencia de ser querido era para mí tan contundente y tan deliciosa, que me sentía del todo enajenado, [...] Estábamos los dos así, aturdidos, ella sin desprender su mano, yo sin aflojarla... (Lp X: 294)

この後、街路の喧噪のなかふたりは身を離し、彼女は一言も発しないまま病院へ行き、サルスティオは街角に独り残される。サルスティオが語るように、カルメンは彼を愛していたが故に、その「証拠」として手を差し出したのか？ 愛していたから、握られた手を引き離そうとしなかったのだろうか？ すでにサルスティオの心理を熟知している読者は、彼の解釈に疑問を呈する

にちがいない。「あなたから絶対に離れない」と言われたカルメンは、サルスティオに怯え、何も答えることができなかったのではないか。手を差し伸べたのは、ただちに立ち去りたいという別れの挨拶ではなかったのか。手を握られたままじっとしていたのさえ、彼女の怯え、もしくは、サルスティオに両手で強く掴まれていたからではないのか。もちろん、語り手の「わたし」は、どちらの解釈が正しいのか一切述べることはない。

侵入と拒絶

この後、サルスティオは以前住んでいた下宿に移り、懸命に学年末試験の勉強に励むが、常日頃の欠席や不勉強がたたリ、最も簡単な科目で失敗する。

第11章、試験落第の知らせに息子のことを案じた母親の命に従い、帰郷する。そこで、当該選挙区選出の議員である叔父が祭りに参加するため、妻をともなって、近郊の中心都市（Pontevedra）に來ていることを聴き知る。彼は、召使いが顔見知りだということを利用し、ことわりもなく叔父夫婦の家に侵入する——「わたしは中に入った。こうしてカルミーニャを驚かせるのが好きだったのだ。彼女の性格の激しさを考えると、出会った最初の瞬間、自分を抑えることも、魂の内奥を表情に出さないことも極めて困難なはずだから」“Entré. Siempre me gustaba sorprender así a Carmiña, porque dada la vehemencia de su carácter, le era muy difícil reprimirse en los primeros momentos y no dejar asomar a la superficie lo interior del alma.” (Lp XI: 303)。

すでに「愛されているという証拠」を得たと信じるサルスティオにとって、カルメンの「魂の内奥」が何であるのか疑いの余地はない。自分への愛を確認することを期待したのだ。いきなり部屋に現れたサルスティオを目にし、挨拶することもできないカルメンに、——「わたしは彼女の両手をつかんだ。その手のひらは冷や汗で軽く湿っていた。彼女を窓際まで引っ張って行き、顔を食い入るように見つめたが、その顔はこれまでにないほど青白く、打ち

のめされ強ばって見えた」“Cogí sus manos, que en la palma humedecía ligero y helado sudor; la arrastré hasta la ventana, y clavé los ojos en su rostro, que encontré más pálido, más deshecho, más desencajado que nunca.” (*Lp* XI: 303)。

彼女は訪問客を迎えるように儀礼的に座ろうと、必死に体を離そうと試みる。だが、サルスティオは許さず、間近で見つめ続ける――

わたしたちはとても近くにいたので、背の高いわたしは容易に体を傾け、彼女から無上の幸せ、愛の印、待ち焦がれた口づけという、それ以上のことをも意味する甘美な恩恵を奪うこともできただろう。でも、敬意というより憐れみが、彼女のやつれた頬を羞恥心で染めてしまうのではないかという畏れがわたしを押し留めた。[……] ダメだ、口づけは決してダメだ。わたしは誘惑を抑えこみ、彼女の両手を握りしめ、震える手のひらに自分の指を絡ませた。彼女はどうかわたしをソファーまで押し戻し、そこに自分が座り、わたしに椅子を指差した。わたしは彼女の両手を放さずそこに腰を沈めた。すると、彼女は哀願するようなくぐもった声でつぶやいた。

「さあ、サルスティオ、放しなさい」

その声はわたしの胸を引き裂き、彼女を放した。

Estábamos tan cerca, que yo, siendo más alto, podría bien fácilmente inclinarme y robarle el supremo bien, el sello de amor, el ansiado beso, favor dulcísimo que implica los restantes; pero me detuvo, más que el respeto, la piedad, el temor de cubrir de vergüenza aquellas mejillas mustias. [...] No: besarla, nunca. Reprimiendo la tentación, le estrujaba las manos, le incrustaba mis dedos en la palma trémula. Ella consiguió por fin llevarme hacia el sofá, y sentándose en él, me señaló la butaca, donde me hundí sin

soltarle las manos. Entonces, con acento suplicante y opaco, murmuró:

—Déjame, Salustio; anda.

Aquella voz me rasgó el pecho. La solté. (*Lp* XI: 303)

サルスティオの脳裏を、今回は、口づけを奪おうという欲望まで過ぎて
いる。自重するが、それは彼女に恥ずかしい思いをさせたくなかったからで
あって、カルメンを心底怯えさせていることには思い至らない。叔母の「放
しなさい」という命令を聴き入れ手を放したことから、一見、自分が彼女に
望まれない存在だと気付いたかに見える。しかし、サルスティオはいつもの
ように、カルメンの言葉を曲解する——「わたしたちふたりは言葉によって
互いの気持ちを表現することはできない。唯一の適切な言語は、長い無言
の抱擁だと理解していた」“comprendía que ni uno ni otro podíamos
expresarnos por medio de palabras, y el único lenguaje adecuado sería
el abrazo largo y mudo.” (*Lp* XI: 303)。

驚いたことに、カルメンは落ち着きを取り戻し、氣力を示しつつ後に退
き、断固たる態度で口にした。

「サルスティオ、わたしを付けたり、しつこくしたりしないようにと1
度注意したでしょう。繰り返さないといけませんね。このあたりに姿を
見せないように、とくにわたしが独りでいるときは」

Con gran sorpresa mía, Carmen se rehízo, cobró aliento, se echó
atrás, y pronunció con firmeza:

—Salustio, ya una vez te dije que no me siguieses ni me
importunases. Llegó el caso de repetírtelo. No vuelvas por aquí, y
menos cuando yo esté sola. (*Lp* XI: 303-4)

読者には、カルメンが本心からサルスティオに会いに来て欲しくないと思っていることは明白なのだが、サルスティオは納得しない。懇願するように異を唱える——「わたしに来て欲しくないと言う。でも、あなたと会わずにわたしは生きられません。あなただって息を付くことさえできないでしょう。[……] わたしと会って少しの間会話を交わすことで安堵することはないのですか？」“Quieres que no venga. Yo no puedo vivir sin verte. Tú tampoco respiras [...] ¿No te sirve de alivio el verme y el hablar conmigo un rato?” (*Lp* XI: 304)。なぜ自分の訪問が邪魔なのか、と食い下がるサルスティオに、カルメンは次のように決意を伝える——「あなたは私が夫のことを愛していない、むしろ彼にある種の嫌悪さえ抱いていると想像しています。そのことを敢えて私に伝えてくれました。それが本当だと仮定しましょう。だとしても、神を畏怖する女性は、真剣に話しているのですからよく聴いてください、自分の夫を愛さなければならないのです。そして、私も夫を愛する、そうでなければ命を絶つと決心しています” “Tú te has figurado que yo no quiero a mi marido, y hasta que siento por él... así... una especie... de repugnancia. Has tenido valor de decírmelo. Pues supón que fuese verdad. Una mujer que teme a Dios... ¡mira que hablo seriamente! tiene que querer a su marido... y yo he resuelto querer al mío... o morir.” (*Lp* XI: 305)。

返答できずにいるサルスティオにカルメンは、このあたりに姿を現さないように、夫がいないときは絶対に、と繰り返し警告するのだが、その間、彼は次のようなことを思い描いている——「追放の宣告にわたしは驚かなかった。予測していたのだ。カルメンはきっと男を物質的に遠ざけようと紙の壁の向こうに身を隠すにちがいないと思っていた。とくに、その男が愛されていることを知らないわけではないときに” “La sentencia de extrañamiento no me sobrecogió. La esperaba. Estaba seguro de que Carmen había de parapetarse tras ese muro de papel que consiste en alejar materialmente

a un hombre, cuando ese hombre no ignora que es querido.” (*Lp* XI: 305)。

サルスティオの「愛されている」という信念は揺るがない。だからこそ、次のように宣言し、部屋を飛び出して行く――

絶えず丁重に振る舞い、大変な敬意をもってあなたと接してきたことを考慮することなく、あなたはわたしを家から追い出すのですね。[……] 傷つき意気消沈しているように見えたので、あなたの慰めになればわたしは願ったのですが。それも許してくれない。心の内面にあることは顔に出ざるをえませんから、はっきり申しましょう。あなたをたとえ僅かでも目にするのが出来ないようなら、わたしは馬鹿な行動に出ることになります。ごく自然のことですが、あなたが外出するときは跡を付け、通りであなたを付け回し、劇場ではあなたを見つめることにします。Me echas de tu casa, sin tener en cuenta lo respetuoso que ha sido siempre mi porte contigo y la consideración absoluta que te he guardado. [...] Te veía abatida y lastimada, y aspiraba a servirte de consuelo. No me lo permites. Pues como lo que está dentro del alma a la cara tiene que salir, yo te digo que, no pudiendo verte de cerca ni un minuto, haré las tonterías que son naturales: te seguiré cuando salgas, te pasearé la calle, y en el teatro te miraré. (*Lp* XI: 306)

これまでの「恩を仇で返す」のかという口調でカルメンを責めるが、読者はサルスティオがこれまで彼女に犯した暴行まがいの振る舞いを思い起こし、彼の事実認識のズレに驚嘆するにちがいない。続く、あなたに会えないなら馬鹿げたことをしますよ、という宣言は、まさにストーカーの心理そのものである。とくに、引用末の「見つめます」“miraré”という言葉は象徴的だ。

また、すでに指摘したように、サルスティオの「愛」は、拒絶されればされるほど増長していくマゾヒズムの感がある——「打ち負かされる毎にわたしの精神は高揚した。叔母の道徳的な堅固さが明瞭に示されるほどに、わたしはより幻想をめぐらし、彼女に、彼女だけに完璧な女性が存すると確信したのだった」“Cada derrota exaltaba más mi espíritu; cada demostración palmaria de la fortaleza moral de tití me dejaba más ilusionado, más convencido de que en ella, y sólo en ella, se cifraba la perfección femenina.” (*Lp* XI: 306)。

決定的な何か

こうして第 11 章から第 12 章にかけ、ガリシア地方の港湾都市（Pontevedra, fig. 9）を舞台に、サルスティオのストーキングが始まる。カルメンとすれ違おうと大通り（la Alameda）を行き来し、教会（la Peregrina）で彼女がミサに来るのを待ち受け、劇場や舞踏会を訪れひそかに彼女を見つめる。そして、運がサルスティオに味方することになる。第 13 章、自尊心を傷つけられたサルスティオが、叔父の政敵仲間と決闘騒ぎを起こし、事件を訴える記事が政敵側の新聞に掲載される。記事の内容に恐れを覚えた叔父が妻をともなって生家、つまりサルスティオの母の家に避難することにしたのだ。叔父に頼まれ一緒に帰省することになったサルスティオは、馬車の中、脇に叔父がいるにもかかわらず、興奮を止められない——「正面に愛する女性がいて、彼女と同じ空気を吸い込み、大樹での有名なワルツ以来、1 年ぶりに彼女の繊細な足とデリケートな身体との接触を感じた。その接触は、わたしの神経を研ぎ澄ませ [……]” “frente a la mujer querida, respirando su atmósfera y sintiendo por vez primera, desde el famoso vals del Tejo, un año hacía ya, el contacto de sus finos piecitos y de su cuerpo delicado; contacto que me crispaba los nervios [...]” (*Lp* XIV: 333)。

実家に到着後は、ひとつ屋根の下にカルメンと住んでいるという想いから、



fig. 9 ポンテベドラ市街図（現在）

出典：Visit Pontevedra, Pontevedra: Concello de Pontevedra, 2012.

自分にブレーキが効かなくなりそうになる――

その午後、そして翌日も [……] 生け贄となっている叔母への内面の敬意という柵が僅かに壊れた。血がみずからの務めを果たし、以前は彼女が身近にいたり、彼女とふたりきりになっても自分を抑えることができたのに、免疫が切れてしまったことに気付き、怯えた。ダンテ風のアガサ・クリスティの愛が、内奥に根付いていたかのように、生き生きと人間的に現れ出てきた。そして、自分が粗野だけでなく、嫌悪すべき敬意を欠いた行動に出かねない気がした。[……] 自殺傾向のある人が深淵の口に近付くのを恐れるように、わたしは自分のことを恐れた。[……] 絶対に自分に打ち勝

とうと思ったが、周囲の状況が助けてくれなかったら、そうできる自信はなかった。Aquella tarde, y también al otro día [...], rompióse algún tanto la valla del respeto interior que ofrecía a mi tití en holocausto; hizo la sangre su oficio, y noté con terror que si antes me dominaba al tenerla próxima o encontrarme a solas con ella, la inmunidad había desaparecido, y el amor dantesco ya se revelaba vivo y humano, como arraigado en las entrañas. Sentíame capaz de incurrir en desacatos, no sólo indelicados, sino odiosos, [...] Me temía a mí mismo, como temen los propensos al suicidio acercarse a la boca de un abismo [...] Me proponía vencerme en absoluto; pero no estaba seguro de conseguirlo, a menos que me ayudasen las circunstancias. (*Lp* XIV: 334-5)

母親と叔父が姉弟で一緒に出かけた日、サルスティオはカルメンとふたりきりになる——「わたしは読書をしながら夢想し、カルミーニャが自分から数歩先に、家の中に独りで居ると考え、血が燃え立った」“Yo me quedé leyendo y soñando, encendida la sangre con la idea de que Carmaña estaba a pocos pasos de mí, en la soledad de aquella casa” (*Lp* XIV: 335)。大胆な言葉をカルメンに掛けようとするが、邪魔が入る。まさに「周囲の状況」が彼を助けてくれたのだ。その夜、夏の暑さもともなうてなかなか寝付けないサルスティオは、一か八かの行動に出るかどうか迷いつつ過ごす——「わたしはあれこれ考えた。悪いことであれ善いことであれ、馬鹿げたことであれ理にかなったことであれ、とにかく決定的な何かをさっさとやってしまう方が良いのではないか。プラトニックな恋人という曖昧で珍しい、ほとんど無駄な状況に終わりを告げる何かを。[……] たとえすべてをぶち壊しにすることになっても”yo cavilaba si no sería mejor hacer de una vez algo, malo o bueno, disparatado o razonable, pero decisivo; algo que

pusiese fin a la situación ambigua, rara y casi tonta de enamorado platónico; [...], aunque fuese echándolo todo a rodar.” (*Lp* XIV: 338-9)。

研究者たちはサルスティオを概して好意的に捉えている。クレメシーは、カルメンの道徳的な美德に惹かれ、「精神的な結合のみを望む」サルスティオの愛はイデアリズムであり、彼は不幸な結婚をしたカルメンを慰労する「プラトニックな愛人」となることを夢見る、長短あわせもつ男だと評する³⁰⁾。同様にロペスは、サルスティオに現実世界と内面の夢想世界の葛藤を看取する³¹⁾。否定的なものでも、例えばサンティアネス＝ティオが、「並外れて豊かな想像力」を見せるサルスティオが、「ロマン主義的愛に特徴的な、愛する女性の理想化と、性的衝動を抑圧する困難さとの間の精神的緊張を体現している」と指摘するに留まる³²⁾。

しかし、彼のこれまでの行動と詳細に提示される心理的状态をたどってきた読者は、上に引いた研究者たちのベダンティックな評言に納得できるだろうか。むしろ、出版直後、新聞紙上に掲載された書評の方が、われわれ読者が今日抱く印象に近いかもしれない。クラリンは、「彼のように凡才で、礼儀を弁えない、うわべだけの男子は見たことがない」と述べ、サルスティオの「余談」に長々と付き合わされることを嘆く³³⁾。アルフォンソにいたっては、「私が主張するように、つまり作者（パルド＝バサン）が強調するように、サルスティオはつまらない人間です。善いことをやるにも悪いことをやるにも気力が足りない、凡庸の尺を一瞬とも超えることのない、取るに足りない男です」と述べ、「要するに、サルスティオにおいて、すべてが否定的なのです」と締め括っている³⁴⁾。

叔父のハンセン病³⁵⁾ 発覚と「わたし」の変化

後篇第15章、サルスティオの母親が、前から怖れていたとおり叔父がハンセン病にかかっている、ハンセン病で亡くなった祖母と同じ症状だと言い立てる。サルスティオは、昔の病気で今は存在しないと落ち着かせようとす

るが、母親は家族の恥だから秘密にしたまま、感染を防ぐため叔父夫婦を残して家を離れようと訴える。発症した叔父とともに見捨てられるカルメンがこれからどうなるかと、彼女を案じている内に、サルスティオは自分の変化を感じる――

わたしは、バールを開いた恐ろしい神秘がもつ瞬間的な力によって、心と感覚の内に比類のない変化が生じたことに気付いた。[……] わたしの中ですべてが純化され、もともと性別のない天使に接するかのようにカルミーニャを見つめることができるような気がした。その上、彼女がハンセン病者と強制的に共生させられるという考えは、死の床にいる重症者の枕元に広がる純粹さや冷酷さをわたしに思い起こさせた。[……] 見方によって変わるが、自分の愛が切断あるいは浄化されるのを感じ、自分が内面の偉大な奉納を捧げることによって、この世の終わりまで永遠に純化されたかのように思えた。Y por virtud instantánea del terrible misterio cuyo velo se había descorrido para mí, noté en mi corazón y en mis sentidos un cambio singular. [...] parecióme que se purificaba todo en mí; que podía mirar a Carmiña como se mira a los ángeles, anafroditas de suyo: es más: la idea de su forzada convivencia con el leproso, me infundió esa pureza o frigidéz que se desarrolla a la cabecera de un enfermo grave, al pie de un lecho de muerte, [...]. Sentí mi amor mutilado o depurado — conforme se entienda — y me pareció, al ofrecer aquella gran oblación íntima, que ya estaría así hasta la consumación de los siglos; que me había purificado para siempre. (*Lp* XV: 347)

サルスティオは、ハンセン病の夫を看病する叔母を想像することによって、自分のカルメンへの愛が浄化され、彼女に純粹な愛を抱くようになった。彼

女を肉欲の対象ではなく、「性別のない天使」として見るようになった。「比類のない変化」が生じたと語る。だとすれば、カルメンのことを「天使」、「聖女」と崇めてきたこれまでの愛が、官能的、肉欲的な愛だったことになるのだが、ともかく、ここでカルメンという女性は、彼に抛れば「性」を失った対象となったことになる。

偶然にも、叔父みずから体調が思わしくないため、避暑でガリシアに来ているマドリードの医師に診察してもらいに行くと言い出し、カルメンを連れて出発する。母親は、夫婦が使ったシーツからタオル、食器、ナイフ、フォークにいたるまですべてを庭で燃やし尽くす。第16章、2週間後のこと、カルメンから手紙が届き、マドリードに戻ったことを知ったサルスティオは、彼女の日々の苦しみを想像しつつ決意する——「叔母さんの救済者となり、あの恐ろしい苦難から解放してあげることが志したのだから。彼女の守護天使、あるいは彼女の受難の伴侶となるのだ」“Como que me proponía nada menos que ser el salvador de mi tití, y redimirla de aquella espantable tribulación. Yo me convertiría en ángel de su guarda o en compañero de su martirio.” (*Lp XVI*: 350)。

下宿に滞在し叔父の家には近付かないという条件で母親から許しを得て、マドリードに戻る。母親に約束したとおり、叔父の家ではなく下宿に居を定め、叔父宅に急いで行く。ハンセン病など存在しないと自分を説得しつつ階段を上ると、玄関で彼を迎え入れたのは、恢復したモレーノ神父。そこで、神父を連れ出して叔父の病状を尋ねる。「人生は試練だ。時には試練の連続で、死によって終わりを告げるものだ」“la vida es una prueba, y a veces una sucesión de pruebas que acaba con la muerte” と説き、神から課された過酷な試練を耐え忍ぶことによって、「キリスト教徒の女」としてカルメンの魂は光り輝くと主張する神父に対し、サルスティオは、美德のために人間性を犠牲にさせるのかと反論する (*Lp XVI*: 354)。そして、彼に代わってカルメンを手助けすることを誓う——「今では叔父の妻はわたしにとって

聖なる女性であり、あなたでさえわたしほどの純粋さをもって彼女の脇にたずむことはないでしょう。彼女の夫が亡くなったとしたら、わたしが彼女と結婚します。それまでは彼女の弟となりましょう。この世とともに友愛が生まれて以来、どんな女性も持ち得ていないほど敬意をはらう弟になるのです」“que hoy por hoy es sagrada para mí la mujer de mi tío; que usted no estará a su lado con más pureza que yo. Si se muere su marido, me casaré con ella; entretanto, seré su hermano, y hermano más respetuoso no lo ha tenido ninguna mujer desde que hay mundo y fraternidad.” (*Lp* XVI: 355-6)。サルスティオは、カルメンが夫を嫌悪しているというのはあなたの妄想であり、今では夫を愛していると主張する神父と、意見を違え別れる。

ハンセン病の叔父に立ち向かうという意気込みにおいて、サルスティオは一方でカルメンを、性を超越した対象として捉え、みずからを彼女の「守護天使」と位置づける。他方、神父への誓いの中に見受けられるように、叔父の死後、女性としてのカルメンと結婚する意思も示している。こうしたどっち付かずの決意から、読者は、サルスティオの主張する「変化」の信憑性を疑うはずだ。

意気地のない「わたし」

第17章、同郷の主治医に叔父の病気がハンセン病であることを確認した後、サルスティオは叔父を訪問する。部屋に案内され、椅子に座った叔父から病気によってねじ曲がった手を差し出されると——「彼の手に触れた瞬間、喉元に吐き気が昇ってきた。[……] わたしの右手はハンセン病患者の手の中で震えた……」“al tocar la suya, me subió una náusea al galillo. [...] mi diestra se estremeció en la del leproso...” (*Lp* XVII: 366)。

対照的に、カルメンはふっくらしスタイルが良くなった上に、肌もつやつやとしている——「確かに、彼女の変容は目に見えて彼女を美しくしていた。

愛の熱情によってあらゆる馬鹿げたことをさせてしまうほどの、別の女となっていた」“Lo cierto es que su transformación la favorecía notablemente: era otra mujer, y mujer capaz de inspirar todos los desvaríos de la fiebre amorosa.” (*Lp* XVII: 367)。カルメンの美しさにもかかわらず、サルスティオはいつものように妄想を抱くことはない——「ポンテベドラで会った物寂しいやつれた女性に感情を高ぶらせたわたしは、今日は、自分の感覚の完全な主人となっていた。病気のことで頭が一杯のわたしは、あの雰囲気のない想像力がかき立てられることは決してありえないと思った」“yo, que había ardido por la triste y desmejorada criatura vista en Pontevedra, hoy me reconocía perfectamente dueño de mis sentidos: abismado en la idea de la enfermedad, no creía que pudiese mi imaginación inflamarse nunca en aquella atmósfera.” (*Lp* XVII: 367)。

極限の状況に置かれ、カルメンは女性としてその魅力を増進させている。対し、これまで被愛妄想からストーキングをおこなってきたサルスティオは、妄想することさえ叶わない。男性としてポテンシャルを低下させている。いわゆる「男性性」を低下させているのだ。読者はこの場面で対照的なふたりの変容を感じ取るはずだ。

暖炉の炎が叔父の足に引火し、足先が焦げてしまう（ただし、足の知覚が麻痺した本人は痛みを何も感じない）というエピソードの後、サルスティオは叔父に繰り返し食事に誘われる——「わたしの辞退がおそろしい感染への嫌悪、あるいは怯えと解釈されることを危惧し、受け入れざるをえなかった」“hube de aceptar, temeroso de que mi negativa se interpretase como asco o miedo al contagio horrible.” (*Lp* XVII: 370)。

体の自由が利かない叔父をカルメンに協力し食堂まで連れて行き、サルスティオもテーブルに付く。だが、付いてはみたが、セッティングされたスーブ皿やグラスから目を離すことができない——「ハンセン病患者と料理を分け合うのか！ [……] 《無理だ、今日のところは一口も体に入らない……

あのグラスの縁に唇をつけたんだ……そして、このスプーンを何度も口に入れたのだ……》“¡Compartir los manjares del leproso! [...] «No, lo que es hoy, no entra bocado en mi cuerpo... En ese borde del vaso puso los labios... y esta cuchara la habrá introducido cien veces en la boca...»” (*Lp* XVII: 371)。冷や汗をかきながら、カルメンがスプーンを分けるのを見つめる。しかし、——「努力はした。スプーンを口のところまで持って行った……結局、口にすることなく皿に戻したのだが。とにかく、喉に阻むものがあったからなのだ」“Hice un esfuerzo, llevé una cucharada a la altura de la boca... para devolverla al plato sin probarla, pues había en mi garganta un obstáculo” (*Lp* XVII: 371)。

威勢の良いことを言いながら、スプーン一杯口にできない主人公に読者はどんな感慨を抱くだろうか。

見つめられる「わたし」

「するとカルメンは視線を上げ、その視線を堂々と落ち着いた様子でわたしに置いた」“Entonces Carmen alzó los ojos, y los puso en mí con serenidad majestuosa.” (*Lp* XVII: 371-2)。Uc-*Lp* において「見つめる」という行為はサルスティオの専売特許だったはずだ。しかし、ここで初めてカルメンは、彼に見つめられることなく、みずから、それも「堂々と落ち着いて」サルスティオを「見つめる」。見つめる主体と客体の逆転現象が起きているのだ。

カルメンの視線は彼を追い回す——「あの視線をわたしは怖れていた。わたしは顔をそらした。しかし、黒く大きな瞳はわたしを追ってきた。磁石の引力によってわたしを振り返らせ、視線に応えるように仕向けるのだった」“Aquella ojeada era la que yo me temía. Torcí la faz; pero las grandes pupilas negras me seguían, y con energía magnética me obligaban a que me volviese y respondiese a la mirada.” (*Lp* XVII: 372)。

サルスティオは、カルメンの視線に苦悩する —

怒った視線でも蔑む視線でもなかった。哀れみ、それもいくらか同情心をともなう哀れみに満ちた視線であり、最低の、もっとも屈辱的なもの。まるで次のように問いかける視線だった。《甥よ、分かりますか？ いかなる信仰にも拠らない、合理主義者の慈悲心とロマン主義的な勇気がどこまで達することができるのか明らかになりましたね。うぬぼれ屋さん！ 虚勢ばかり張って、結局、ここでスプーン一杯食することもできない！ [……] 哀れな人、同情してしまう！ 私の代わりに潰瘍を治すなんてとうてい無理ですね！》。No era un mirar airado ni desdeñoso: estaba impregnado de piedad..., pero de piedad algún tanto compasiva... lo peor, lo más mortificante. Parecían decir: «¿Lo ves, sobrino? Ahí tienes tú hasta donde llega la caridad racionalista y el valor romántico, que no se apoya en creencia ninguna. ¡Fantasmón! ¡Tantas plantas como has echado... y no puedes ni tomar una cucharada de alimento aquí! [...] ¡Pobretín, y qué lástima me estás dando! ¡Para que te pusiesen a ti a desempeñar mis funciones y a curar llaguitas!». (*Lp* XVII: 372)

これまでカルメンの反応（表情、言葉、動きなど）をことごとく誤って解釈してきたサルスティオだが、この場面で初めて正解したと言える。なぜなら、彼に食事は無理だと気付いたカルメンが彼を救済してくれるからだ——「しばらくして叔母は、下層の悪魔を愚弄する熾天使のように微笑んだ。そして、絶望的な優しさでわたしに声を掛けてくれた。『サルスティオ、食欲がないなら食べなくて良いですよ。今日は遅くに昼食を取ったのでしょうか』」
“Al cabo mi tití sonrió como debe de sonreírse un serafín que se burla de algún diablillo de escalera abajo... y me dijo con desesperante bondad:—

Salustio, si no tienes ganas, no comas... Me parece que hoy has almorzado tarde.” (*Lp* XVII: 372)。

サルスティオは、カルメンの救済にすがり、友人たちと遅くに昼食を取ったと嘘をつき、食事から解放される。途端に彼は、快活に話を始め、叔父が勧めるコーヒーを固辞しつつ留まる。ただし、同郷の医者が往診に来て引き取るのを機に、逃げ出す——「あの空気に息が詰まりそうだったわたしは、自分自身を抑えることができず、彼と一緒に逃げ出した……叔父に手を差し出すこともせずに」“yo, que no me resistía a mí mismo, que creía ahogarme en aquella atmósfera, me escapé con él... sin tender la mano a mi tío.” (*Lp* XVII: 373)。

サルスティオとカルメンの立場は明らかに逆転している。先に、このシーンでカルメンの女性性が増し、サルスティオの男性性が減じていることに言及したが、17章末のサルスティオの体たらくを見るにつけ、読者は、男性性を構成する「男らしさ」、「雄々しさ」が彼に欠落していること、すなわち、サルスティオにおける男性性の弱体化に気付かないはずはない。

女を弄ぶ

第18章、医者と叔父宅を出たサルスティオは「気晴らし」をしようと劇場に立ち寄る。たわいない喜劇だったが、以前叔父に連れられ足を踏み入れた下町の家で知り合った娘が家政婦役で舞台に出ているのに気付く。その瞬間、彼女の姉ベレンのことを思い出す——「確言できるが、あの娘を目にするまでは、彼女の姉のこと、わたしに変わらない身に余る好意を示し、特別扱いしてくれる善き女性ベレンの存在を少したりとも思い起こすことはなかった」“Puedo asegurar que mientras no vi a aquella criatura, ni por asomos me acordaba de la existencia de su hermana, la buena moza Belén, que me había distinguido siempre con constantes e inmerecidos favores.” (*Lp* XVIII: 376)。そして、激しい想いに突き動かされる——「い

つもはほとんど関心がなかった彼女のことを思い起こしたとき、これまで1度も感じたことのない奇妙な影響がわたしに現れた。それは衝動的に幸せを希求する若い心の、半分ロマン的で半分激しい表出に似た何かだった」
 “Su recuerdo, de ordinario indiferente, o punto menos, para mí, me produjo efecto extraño, no sentido jamás: algo que se parecía a la efusión, mitad romántica y mitad ardorosa, de un corazón joven que aspira impetuosamente a la dicha...” (Lp XVIII: 376)。

サルスティオは、ベレン宅を訪ね、突如の来訪に驚く彼女に対しその美しさと生を讃え、抱擁する——「なんてお前は美しいんだ！ [……] なんて健康的で、若々しく、艶やかなんだ！ もものようにお前をかじってやろう。[……] 生は本当に美しい。すべてが光，花，笑いとなる。病気や死といった不愉快なことは語ってくれるな！」 “¡Qué reguapa estás! [...] ¡Qué sana estás... qué fresca y qué guapetona!... Te mordería lo mismo que si fueses un albérechigo. [...] La vida es hermosísima; toda se vuelve luces, y flores, y risas, y... No me hables de enfermedades ni de muerte... ¡cosas tan antipáticas!” (Lp XVIII: 377-9)。

空腹を訴えるサルスティオに、ベレンはさまざまな食料を持ち出してきて食べさせる。シャンパンに酔ったサルスティオは、幻想を見ながら、彼女の膝で眠りに付く——「『生は……』わたしは彼女を自分に抱き寄せながら言った。『お前そのものだ』”La vida... —dije aproximándola más a mí— la vida... eres tú.” (Lp XVIII: 379)。

ただし、サルスティオ自身が認めるように、ベレンの美の礼賛には、彼の「主観」が間違いなく作用している——「おそらく彼女の実際的美を増大させたのは、わたしの主観的な要素であった。たくましさや活力に渴いたわたしの両眼に、その偉大な女性が壮麗で誘惑するように映っていたからなのだ」
 “Acaso al incremento real de su belleza sumaba yo el elemento subjetivo, y en mis ojos, sedientos de robustez y vitalidad, era donde se

reflejaba tan magnífica y tentadora la gran mujer.” (*Lp* XVIII: 377)。

文字通りに解釈するなら、ハンセン病の叔父の病状を目の当たりにし、病気や死に嫌気を感じたサルスティオが、金持ちに囲われた美女ベレンに生を求めた。サンティアネス＝スティオが述べるように、ベレンは抑圧されていた若い性欲のはけ口となったことになる³⁶⁾。

しかし、前章末で、男性サルスティオと女性カルメンの立場が逆転したことを考え合わせると、どうだろうか？ カルメンに対し「男性性」を失墜してしまったサルスティオが、自分のそれを認めてくれるベレンのもとを訪れた、と解釈できないだろうか。クックが指摘するように、サルスティオはベレンの愛する「唯一の男性」が自分だと知っていた³⁷⁾。ということは、彼女が失った男性性を回復するのに最適の相手だと知っていたことになる。つまり、サルスティオがベレンを男性性回復の手段として利用したと言えるだろう。

翌朝（第19章）、目を覚ましたサルスティオは「彼女が目に入らない場所にすぐさま行ってしまいたかった」「¡Yo sí que quería plantarme donde la perdiese de vista!” (*Lp* XIX: 381) と、ベレンを振り切る――

やっと逃げ出した。そして、下宿で足から頭の先まで洗い、服を着替えて、クラウディオ・コエリョ通りに行って、食事のときの悪い印象を消し去ってやると自分自身に誓った。《サルスティオ、おまえが男か操り人形かはっきりさせるんだ。昨夜の振る舞いは……恥ずべきことだ。[……] あの素朴で控えめな女と同じ勇気を持っていなかったのだから。彼女がどんな女か身に浸みて分かっただろう。昨晚おまえは彼女に「哀れみ」を抱かせたにちがいない。今日、名誉を回復するんだ！》Por fin logré zafarme, y en mi casa me lavé de pies a cabeza, me cambié de ropa, y me juré a mí mismo ir a la calle de Claudio Coello a borrar la mala impresión de la comida... «Salustio, ahora veremos si eres

hombre o pelele. Anoche te portaste... Vergüenza debías tener. [...]
 No tienes tú, no, el coraje de esa mujer sencilla y modesta... Y lo que
 es ella te ha calado... Anoche es seguro que le infundiste *lástima*.
 ¡Rehabilitate hoy!» (Lp XIX: 382)

ベレンの家を出たサルスティオは身を清め、前夜逃げ出した叔父宅へ「名誉の回復」に向かう。こうした行動と決意が、ベレンが単に性欲のはけ口だったわけではなく、「男性性」回復の手段であったことを裏付けている。サルスティオの決意には、女への対抗意識が——「あの素朴で控えめな女と同じ勇気を持っていなかったのだから」と——明確に現れており、男性性を失墜させたカルメンに立ち向かおうという意思を確認できるからである。

対決と敗北

カルメンと再会したサルスティオは、ハンセン病患者が今後どんな症状を見せるかを説明しつつ、彼女に懇願する——「聴いてください、わたしは学業やすべてをなげうち、あなたを手助けします。[……] いささかも私心はありません。つまり、『以前のわたしではない』のです。[……] 手助けを申し出ているわけではなく、手助けさせて欲しいと懇願しているのです。わたしにとって大いなる満足となるでしょうし、私の求める唯一の幸せだからです。叔母さん、断らないでください！」“Pues... yo... yo puedo prescindir de estudios y de todo... escucha... y ayudarte, ayudarte... [...] No llevo mira interesada alguna... quiere decir que *no soy el de antes*... [...] Y esto no te lo ofrezco como favor, no: te lo ruego... será una satisfacción inmensa para mí. Es la única felicidad a que aspiro. Tití... anda... ¡no me lo niegues!” (Lp XIX: 384)。

この発言には、第一に、サルスティオの懸命さが見て取れる。もう一つ、この場でサルスティオがカルメンをどのように呼んだか見逃すべきではない。

『あるキリスト教徒の女』第12章以降、《カルメン叔母さん》“*tití Carmen*”と名指ししていたサルスティオが、上の引用では《叔母さん》“*Tití*”と、途中で言い淀んでいるのだ。引用個所以外でも、“*Carmen*”，もしくはガリシア地方特有の縮小辞を付けた“*Carminiña*”とだけ呼び、みずから決めた呼び名“*tití Carmen*”を使用することはもはやない。サルスティオとカルメンの立場の逆転は、一種の「父権性」の失墜として、サルスティオが用いるカルメンの呼び名に顕現化している。

看病を手伝わせて欲しいと懇願するサルスティオに、カルメンは、看病に疲れてはいない、かえって自分は元気になった。その上、哀れな病人たちは彼ら愛する人に世話を受けることを望んでいると説得する――

「愛情です」と彼女は興奮して答えた。「[病人たちが]彼らをもっとも愛する人をより望まないはずがあるでしょうか？」

「彼らをもっとも愛する人！」わたしは聴いたことが理解できなかったかのように繰り返した。

「そのとおり。私以上に彼を愛している人は誰もいないでしょう？」と叔父の妻は自然ではあるが、同時に激しく言った。

— ¡Pues sí, el cariño! — afirmó ella con toda la efusión de su alma —. ¿Cómo no han de preferir a aquella persona que más les quiere?

— ¡Aquella persona que más les quiere! — repetí como quien no entiende lo que oye.

— Pues claro. ¿Le ha de querer nadie tanto como yo? — dijo con naturalidad, al par que con ímpetu, la esposa. (*Lp* XIX: 385)

サルスティオは、カルメンの最後の言葉に衝撃を受ける――「わたしは左の脇腹に、まるで鋭利な錐で心臓の表皮に穴を空けられたような痛みを感じた。腎臓が収縮したが、これは幻滅して自分が傷付いたり、自尊心がひどく

辱められた時にいつも感じた症状だった」“Sentí un dolor al lado izquierdo, como si me taladrasen las telillas del corazón con taladro muy fino; mis riñones se contrajeron, fenómeno que siempre he notado en los momentos en que un desengaño me hiere o siento profundamente mortificado mi amor propio” (*Lp* XIX: 385)。

「相手が他の男を愛している」と聴かされたサルスティオは、「自尊心」が傷付けられたかのような痛みを覚える。「相手に愛されている」という彼の被愛妄想（エロトマニア）が傷付いたのだ。彼の男性性が辱めを受けたと解釈できるだろう。もちろん、サルスティオは、男性性を保持する必要に駆られる――

「神がお聞きになれるよう、答えてください。あなたが夫を愛しているというのは本当ですか？」

「この世で彼以上に愛した男性がいないほどです」[……]

「カルメン、お願いします、私を哀れんでください。[……] それを知ることが必要なんです。さもなくば気が狂ってしまいます。夫を充分に看病し世話を焼くというのは、至極当然ですし、あなたの性格にとっても合っています。[……] しかし、このことと「愛する」ことは別物です。[……] あなたが夫を愛していることをわたしに納得させることができますか？不可能でしょう」

—Pues porque nos oye... contesta: ¿es verdad eso de que quieres a tu marido?

—Más que he querido a nadie en este mundo. [...]

—Carmen, por Dios... Carmen... ten compasión de mí. [...] Necesito entenderlo... Me vuelvo loco. Es natural, muy natural; está muy en carácter en ti que asistas bien a tu marido, que le cuides [...]. Pero una cosa es eso, y otra el *querer*... [...] ¿Me vas tú a convencer de que

le quieres? Imposible. (*Lp* XIX: 385-6)

カルメンは微笑みながら、しかしはっきりと答える——夫が健康だったとき冷たく接したことを今では後悔しており、償う試練を与えてくださった神に感謝している。病状が悪化するにつれ、夫への愛は強くなり、皮膚の潰瘍も気にならない。夫もまったくの別人になり、二人を隔てていたものが消え去った。夫との結婚は望んだものではなかったが……

ここに来て、彼女の目は輝き、天上のような表情を浮かべ、そして唇がやさしくつぶやいた。

「[……] 今では、夫を選ぶようにと言われたら、目を閉じたまま、今の夫です、他の誰でもない！」と答えるでしょう」

彼女は輝く瞳をわたしに釘付けにしつつ繰り返した。

「他の誰でもないと！」。

Al llegar aquí, sus ojos resplandecieron, su semblante tomó expresión celestial, y sus labios murmuraron suavemente:

—[...] Pues hoy... [...] si me dan a escoger marido... con los ojos cerrados también, digo que el que tengo... ¡y ninguno más!

Clavó en mí sus luminosas pupilas al repetir:

—¡Ninguno... ninguno más! (*Lp* XIX: 388)

この場面でも、「彼女は輝く瞳をわたしに釘付け」にする。カルメンがサルスティオを「見つめる」のだ。失地（男性性）回復をねらったサルスティオの企図は潰えたと言える。

サルスティオは黙りこみ、こんなに醜くなった夫をより愛するなんて考えられない、カルメンは天啓を受けたにちがいないと自問しつつ、自分はふたりの邪魔になるのかと訊ねる。そんな申し出をして自分を苦境に追いやる必

要はない、先週の日曜と同じように数ヶ月断食せざるをえなくなりますよ、というカルメンの返答に、サルスティオは再び自尊心が傷付き、叫ぶ——「今日、わたしを試してみてください。一人前の男として振る舞ってみせます。わたしたち男皆の顔に灰を投げつける（打ち負かす）ほど度胸のある、あなたのような女性みたいには参りませんが。わたしから名誉回復の機会さえ奪ってしまうのであれば、少なくとも、ひとつのことで恵み深くしてください」“Ponme a prueba hoy, y me portaré como un hombre... ya que no como una mujercita de tu temple, que nos planta la ceniza en la frente a los hombres todos. Y toda vez que hasta la ocasión de rehabilitarme me quitas... sé al menos benigna en una cosa.” (*Lp* XIX: 389)。

サルスティオが「わたしたち男皆」「los hombres todos」と複数形で自分を表現し、自分を含む〈男性 vs 女性〉カルメンという構図を使って話すことから、彼の「男性性」の意識は明らかであろう。失地回復の望みが潰えたサルスティオは、失地を回復するどころか、自分の「男性性」の存続意義に係わる問いをカルメンに投げかける——

「告白してください。夫に恋心を抱く前に、わたしを、この罪人を少しは愛していましたよね。そして、ある時には彼に対するのと同じくらいわたしの世話をしてくれましたよね」

「否定しません。もちろん、世話をしたということについて」

「もう一方については？」

「答えないことにします。答えることさえも軽率だと取られかねませんから」と彼女は真面目に答えた。

—Confiesa... ea, confiesa que antes de enamorarte de tu marido... me quisiste un poco... a mí, a este pecador... y en cierta ocasión me cuidaste casi tanto como a él.

—No lo niego... Es decir, lo del cuidado.

—¿Y lo otro?

— No contesto. Sólo el contestar sería ya un resbalón — dijo seriamente. (*Lp* XIX: 389)

サルスティオが尋ねた「世話をしてくれた」とは、前篇『あるキリスト教徒の女』の最終章でカルメンから受けた看病のことだが、肝心の「自分を愛していたか」という質問に、カルメンは答えない。端的に言うなら、サルスティオの男性性は、カルメンの「答えない」という返答によって、宙に浮いたまま放置されることになる。

この後、サルスティオは、カルメンに嘲笑されないという目的だけのために、表面的な「手助け」（わずか2行の描写で足るほどの）をする——「叔母に自分の気弱さを笑われないよう、彼女の後に付いて、勇気を持って入って行かなければならなかった。最初の日よりもっと楽にハンセン病患者の手を取り、握手することができた。わたしは入念に自然さを装って彼に近付き、いろいろ口実を見つけては彼の服に触り、もっと接近しようとした」“Tuve que seguirla, y entrar con valor, no fuera que se riese de mi poca entereza la tití. Se me hizo más fácil que el primer día tomar y estrechar la mano del leproso. Me acerqué a él con estudiada naturalidad, y busqué diferentes pretextos para tocarle la ropa y aproximarme bien.” (*Lp* XIX: 389)。

彼のハンセン病への怯えは明らかで、サルスティオはこの後、今際の時まで叔父宅に足を踏み入れることはない。

カルメンの勝利

『試練』最終章は、後で考察するように、前章末から相当な時間（2年半から3年）が経過しており、大学を修了したサルスティオは、仕事でマドリッド近郊の町（Aranjuez）に滞在している。そこを訪ねてきた親友ポルタル

に、サルスティオが試験勉強の合間に書いた自伝風小説を朗読するという設定のなかで、読者は叔父の最期を知る。

最期の数ヶ月、叔父は妻と医者以外の誰との面会も拒絶する。サルスティオは母親の命令がなければ面会に行くと言い張っただろうと述べるが、内心感染を恐れていたのだ——「病が続く限りあの家に足を踏み入れることはしない〔という決心だった〕。このことは基本的な気遣いだと思えた。この決意にいくらか関与したかどうか分からないが、感染性の恐ろしい病がわたしにはまったく冗談とは思えなかったのだ」“la de no poner los pies en la casa mientras durase el mal. Parecíame esto de elemental delicadeza; no sé si en mi resolución entraría por algo la poca gracia que me hacía el contagioso y horrible padecimiento.” (*Lp* final: 398)。

ところが、ある午後、モレーノ神父が訪ねてきて、彼に会いたいという叔父の最期の望みを伝える。叔父の寝室で——「わたしの目に入ったのは不明瞭な形の物体、何層も包帯を巻かれた病人の頭だった。聾啞者のようなしゃがれた変な声がわたしを呼んだ。病気が声帯を変質させたにちがいがなかった」“vi un objeto de forma indistinta: la cabeza del enfermo envuelta en vendas múltiples. Una voz ronca y extraña, como la de los sordomudos, me llamó; sin duda la enfermedad alterara las cuerdas vocales...” (*Lp* final: 399)。

すでに話すことさえ思いどおりにならない叔父が、遺産相続において不等だったことを謝罪する——

このとき生ける屍は体を起こそうと試みた。体をねじり、音が包帯の隙間と壊れた喉頭の奥から漏れ出してきた。なんて音だ！……それはこう語っていた。《サルスティオ、ユル、赦してくれ。あなたの母親にもユル……と伝えてくれ》。その声はわたしをぞっとさせ苦しめた。喉を締め付けられ息切れし、窒息しそうになりながらわたしは叫んだ。「わた

しに赦しを求めないで。お願いですから求めないでください。わたしこそ求めるべき当人です……」 Al llegar a este punto, el viviente cadáver pretendió incorporarse, ladeóse un tanto, y de entre sus vendas y del fondo de su destruida laringe salió un acento... ¡qué acento, señor!... Decía: «Salustio... per... perdóname... y dile a... a... tu madre que... me perd...». ¡Qué espantoso daño me hizo aquello! Se me apretó la garganta, se me cortó el aliento, y exclamé ahogándome:

—No me pida usted perdón... Le ruego que no me lo pida usted... Yo soy quien debe... (*Lp* final: 399)

あれほど嫌悪していた、それも正当な根拠もなく憎んでいた叔父に対し、サルスティオが逆に赦しを求めている。彼は疑いなく叔父の死を悼んでいるのだ。「叔母カルメンの理想化」のパートで考察したように、サルスティオをカルメンへの愛に掻き立てたのが、叔父への憎しみであったことを思い起こそう。「もしサルスティオが叔父を憎んでいなかったら、カルミーニャを愛することもなかった」³⁸⁾。この点にもとづき、多くの研究者が、サルスティオは「障害となる仲介者」としての叔父の存在を実際は望んでいた、フェリペへの憎悪を増長させることによって、カルメンへの愛に供しようとした、情熱は障害によってこそ燃え上がるのだから、と解釈している³⁹⁾。果たしてそうだろうか？

叔父が財産の多くをサルスティオに譲渡すると遺言したことが神父を介して伝えられる。サルスティオは、相続を固辞するが、神父にたしなめられる。カルメンが休息のため部屋を出ようとした瞬間、叔父が叫ぶ——「行かないでくれ、カルミーニャ！」—「¡No te vayas... Carmiña!」(*Lp* final: 400)。

フェリペの枕元に駆け寄ったカルメンは——「吐き気を催させる病気に蝕まれた唇の上に、以前のわたしであれば心底、怒りで震え上がったほど激し

く、自分の唇をしっかりと長い間重ね、聖なる口づけの音をさせた……」
 “Y sobre aquellos labios, roídos por el asqueroso mal, con una
 vehemencia que en otra ocasión me hubiese estremecido de rabia hasta
 los mismos tuétanos, apoyó su boca, firme y largamente, y sonó el beso
 santo...” (*Lp* final: 400)。叔父は体を起こし、一瞬、活力を取り戻したか
 に見えたが、再び枕に頭を落とし、息絶える。

カルメンは今際の夫に「以前のわたしであれば心底、怒りで震え上がった
 ほど激しく」口づけする。接続法過去完了形 “me hubiese estremecido”
 によって事実と反する内容であることが明示されているように、サルスティ
 オは叔父の最期の時点で、彼に「怒り」、つまり「憎しみ」や「嫉妬」を一
 切抱いていない。これは、先行研究が主張するように、「障害となる仲介者」
 としての叔父に実際は生き長らえて欲しいという想いから、憎しみを失った
 のだろうか？

Uc-Lp 最終ページ、「いま」に戻った場面で、ポルタルがサルスティオに
 尋ねる——「未亡人といつ結婚するんだい？」「何てことを思いつくんだ！
 彼女は厳粛な喪に服していて、その上、病気なんだ。看病が終わった後、疲
 れて体を壊してしまったんだよ。ポンテベドラに戻っており、彼女のことは
 母から聞いているだけだけど」“—¿Y cuándo te casas con la viuda?”
 “—¡Vaya una ocurrencia! Está con su luto riguroso... y padeciendo, pues
 acabada la asistencia, se vieron las resultas de tanta fatiga en el
 quebranto de su salud. A Pontevedra se ha vuelto. Sé de ella por mi
 madre.” (*Lp* final: 401)。

サルスティオの返答には、カルメンへの関心の欠如を看取れる。彼はカ
 ルメンへの愛を失ったのだ。読者は彼が本当にカルメンと結婚するつもりか
 と疑うにちがいない。だが、ビダーなどのように、「カルメンは最後、存在
 意義を失う。夫が死去し、サルスティオは彼女を所有したいという欲望を失っ
 た」⁴⁰⁾ という解釈はどうだろうか？

筆者の解釈は以下のようなものだ。第19章末、カルメンに対し完全に敗北を喫したサルスティオは、みずからの男性性を失墜した。男性性を失った彼には、男として叔父フェリベと張り合う、嫉妬する、憎悪する気持ちは起きない。単に、感染に怯えるだけである。

では、カルメンとの今後の展開は？ 臨終の折、カルメンは、サルスティオが「吐き気を催させる病気に蝕まれた」と知覚する夫の唇に、「激しく」、「しっかりと」、「長い間」自分の唇を重ねる。終始怯えた態度を見せるサルスティオと対照的に、カルメンの「男らしさ」、「雄々しさ」が前景化される。サルスティオにとって、カルメンは「男性」となるのだ。カルメンの口づけは、全篇をとおり、男性性を露に示しながらストーカー行為を働き続けたサルスティオに対する、カルメンの男性性の勝利を象徴していると解釈できるだろう。もちろん、男性性を見せつけられたサルスティオが、今後、カルメンを愛することは難しい。

では、この結末を読者はどう感じるだろうか。前篇第8章以降ほぼ35章にわたって、カルメンの理想化、盗み聞き・盗み見、聖女化、のぞき見、被愛妄想、告白、ストーキング、待ち伏せ、侵入と拒絶、決定的な何か……と、サルスティオに付き添った挙げ句の、曖昧な結末、おそらくカルメンへの愛を失うというエンディングである。ヘミングウェイは、*Uc-Lp* が心理小説として失敗した第一の要因として、「最後の最後までサルスティオの精神にまったく変容が見られない」点を挙げる⁴¹⁾。ただ彼は、サルスティオが後篇最終章、カルメンの影響で合理主義やロマン主義への信仰を失いキリスト教徒となったと（文字通りに解釈し）、これを例外的な変容と見なしている。筆者は、この変容を除くなら、彼の指摘に同意できる。全篇にわたって変化しない、成長が見えない主人公サルスティオに読者は呆れるほかないだろう。

語り手「わたし」による歪曲

「わたし」は『あるキリスト教徒の女』冒頭から、「いま」の時点に身を置

きつつ、自分の〈過去を思い起こし〉語る。その際、当然、過去の情報を〈選別〉し、ある時は〈並び替え〉語る、という姿勢を明示する——「そこで過ごした日々はわたしに消し去ることのできない思い出を残してくれ、それを思い起こすとき、口元に笑みがこぼれ、心を軽率な歓喜でかすかに満たしてくれる。そのなにかをお話しよう」、「いまよく考えると、分からない」“El tiempo pasado allí me dejó indelebles recuerdos, que me traen la risa a los labios y unas vislumbres de indiscreto júbilo al alma cuando los evoco. Indicaré algo de ella,” (UcI: 6), “Hoy, cuando reflexiono, no lo entiendo.” (Uc I: 9)。

ただし、自らの語りが産み出したテキストに「叙述」“narración”, 「物語」“relato”と言及するだけで、その性質について説明することはない。また、次の引用のように、当初は、恣意的に「偽装」する、すなわち情報歪曲の可能性を否定する——「事実を偽装することはわたしの役にまったく立たないだろう。というのも、この叙述の流れの中で激しく際立ってくるに相違ないから」“de nada me serviría disfrazarla, pues tiene que resaltar con fuerza en el curso de esta narración” (Uc III: 27)。

選別、つまり削除するとしても、それは読者が知るに値しない情報だから省略すると述べる⁴²⁾——「学年末の出来事や試験のことはすべて省くことにする。というのも、わたしの未来の運命にもっとも関心のある読み手にとって、わたしがその年自分の学科にパスしたとを知るだけで事足りるだろうから」“Saltaré todos los incidentes de fin de curso y exámenes, pues al lector que más se interese por mis futuros destinos le bastará saber que aquel año aprobé mis asignaturas” (Uc V: 43)。

要するに、「わたし」は自分や他の作中人物の会話を含め、できるだけ過去に忠実に語る（ときには再現する）という姿勢を示す——「思い起こすに、彼（神父さま）は正直に満足な表情を浮かべ、皆さんがご覧になるような言葉を使ってわたしに返答なさったにちがいません」“Recuerdo que él

se mostró sinceramente satisfecho y debió de contestarme por el estilo que verán ustedes” (*Uc* XIX: 162)。

ところが、同じ「わたし」は、前篇『あるキリスト教徒の女』最終章の冒頭、突然、そうした姿勢に真向から対立する語りを宣言する――

わたしはそのことを、無意味で滑稽なまでの詳細とともに思い起こすことができるだろうか。夢と現実がどうにも分かち難く混ざり合っており、自分にも夢がいつ終わり、現実がいつ始まるのか分からない。そのうえ現実が、それを感知する主体のなかで、すなわち、わたしにとっての表象のなかだけに存在したと誓うこともできない。ただし、その表象こそがわたし自身にとっての崇高な現実には他ならない。A ver si puedo recordarlo con todos sus detalles insignificantes y hasta cómicos, con su mezcla de sueños y realidades, tan inseparables, que no sé dónde acaban los primeros y empiezan las segundas, ni puedo jurar que estas hayan existido más que dentro del sujeto que las percibía, en mi propia representación, que es para mí mismo la realidad suprema. (*Uc* XXII: 191)

夢と現実との混淆、読み手に提示する「現実」が「感知する主体」の中にしか存在しなかったという可能性、自分の主観的な表象を「崇高だ」と評価する、こういった語り手の姿勢は、読み手に、「わたし」による恣意的な歪曲の可能性を示唆することになる。

事実、この記述に刺激をうけたのか、前篇のみが刊行された時点の書評において、クラリンは「主観主義が優勢とならざるをえない」「自伝形式」の語りを、「本当とは思えない」、「道理に合わない」と、信憑性の観点から非難している⁴³⁾。

上記の語り手の宣言を、『あるキリスト教徒の女』最終章でサルスティオ

が高熱を出した、強い解熱剤を服用した、というエピソードと関連づけ、それが原因で「夢と現実との混淆」が生じたと解釈する、語り手に好意的な読者もいるかもしれない。ところが、後篇『試練』第5章中、「わたし」は、大胆な疑問を投げかけた後カルメンがどんなリアクションを取ったのか語ることを中断し、先ほどとほぼ同じ内容を繰り返す——「わたしが語っている物語において、読み手はさまざまな出来事の一面、わたしにとっての一面しか目にできません。わたしの眼をとおして強い女の魂を検討することになる。つまり、出来事がわたしの語るように起きたとはわたしは誓えない。ただ、わたしにはそのように見えたとは断定できるだけなのです」“en la historia, que voy narrando, el lector no puede ver más que un aspecto de los sucesos, el que tenían para mí; y al través de mis ojos es como ha de considerar el alma de la mujer fuerte. Yo no juro, pues, que los hechos fuesen cual voy a referirlos; sólo puedo afirmar que así se me representaban.” (*Lp* V: 248)。

信頼できない語り手「わたし」

サンティアネス＝ティオは、上述の「わたし」のコメントに確認できるような、「自己物語世界的な」語りに本質的に内在する認識の不確定性に加え、主人公サルスティオが示す豊かな想像力と記憶の不確かさによる「現実」のデフォルメを指摘し、「わたし」がいかに「信頼できない語り手」(ウェイン・C・ブースの用語)であるかを明らかにしている⁴⁴⁾。

「わたし」の想像力による現実の歪曲に関しては、他の作中人物が「わたし」の「現実」を一切支持しない点を挙げる⁴⁵⁾。サルスティオの性格をもっとも理解している作中人物だと言える親友ポルタルは、カルメンを理想化し「聖女だ」、「キリスト教徒の女」だと言い立てるサルスティオを心配し、たびたび疑問を投げかける——「完璧なキリスト教徒の女だって！ お前を完璧なキリスト教徒の女が誘惑すると言うのか？ ひょっとしてお前が完璧な

キリスト教徒の男とでも言うつもりなのか？」「¡Una perfecta cristiana! ¿Y por qué te seduce una perfecta cristiana? ¿Eres acaso perfecto cristiano tú?» (*Up* XIX: 159)。カルメン本人さえ、さらに彼女を高く評価するモレーノ神父さえ否定する「聖女」、「殉教者」といったイメージを支持するのは、「わたし」だけなのだ。

叔母に愛されているというサルスティオの思い込みに関しても、見舞いに訪れたポルタルは、叔母が看病中自分に優しく接し、抱擁を許してくれたと自慢する友人をたしなめる——「実際のところ叔母さんの反応を夢見たわけじゃないというのは確かなのか？ たわいなく幻想を抱くからな！」「¿Y estás bien seguro de que efectivamente no has soñado las demostraciones de la tití? ¡Porque es tan fácil ilusionarse!» (*Lp* I: 203)。実際、こうした第三者のコメントをもとに、読者はサルスティオの「被愛妄想」(エロトマニア)を確信するにいたる。

サルスティオの妄想に病的な側面があることは友人も認めており、例えば、カルメンが叔父を嫌悪し、彼女と自分は叔父への嫌悪という点で共感し合っているとサルスティオが力説する場面で、ポルタルは、お前は病気だと言って家に帰らせようとする——「気がふれているとは言っていない。でもお前は熱がある。眼から火花が出ている。上着をしっかりと着て、家に戻ろう」「¡Si no digo trastornado! Pero tienes fiebre. Echas chispas por los ojos. Embózate... y a casita.» (*Lp* II: 219)。

ただし、これまでの考察によって明らかなように、読者が「わたし」を「信頼できない語り手」だと感じるのは、彼が情報を恣意的に歪曲するからだけではない。ビダーも指摘しているように、サルスティオは頻繁に「誤る」語り手なのだ⁴⁶⁾。自分自身のことをはじめ、周囲の人々、とくにカルメンの想いを誤って解釈する。サルスティオがいかに自分に都合の良いように間違っ

て解釈したかは、引用した個別のケースにおいて明らかだろう。

読者は、*Uc-Lp* 全篇をとおして、叙述する語り手「わたし」に対し、「信

頼できない」という印象を強めていく。「わたし」が産み出す言説の信頼性が漸次的に低下していくのだ。

最終章まで自伝だと示さない

もう一つ、*Uc-Lp* は言説の信頼性を低下させる要因を備えている。むしろ、*Uc-Lp* は、構想された時点から、意図的に、不安定さのなかに放置されていると言えるかもしれない。というのも、読者は、このテキストが、主人公サルスティオが「いま」の時点に身を置きつつ自分の過去を思い起こし語った言説であることを、散見する「わたし」のコメントによって理解する。ところが、そもそもなぜ、「わたし」は回想しているのか、「わたし」が身を置く「いま」とはいつのことなのか、どういうポジション（年齢、人生経歴、価値観など）から語っているのか、テキストの起源にかかわるこうした情報が、後篇『試練』の最終章まで一切提示されないからである。読者は、前篇22章と後篇20章中、41章にわたって、つねに不安／不満を抱きながら読み進めるしかない。どんな語り手であれ語りのスタートゥスを示さない「わたし」に、読者が全幅の信頼を置くことができるはずはない。

実際、読み手は、『試練』第11章、次のように突然、語り手が挟み入れたコメントで初めて、このテキストが「自伝」だと知る——「それはそうと、自伝を書いている以上、わたしがすばらしい詩行をそれほど愛好しないことを表明しておきましょう」「Y a propósito, ya que hago mi autobiografía, declararé que no profeso gran afición ni a los versos excelentes” (*Lp* XI: 312)。このように、読み手にとって重要な「自伝」という情報を、何かのついでにといった調子で明かす。そして結局、「わたしが自伝を書いている」という情報しか提示しない語り手に、読者は不信感を募らせていく。

最終章は、次のような時間と場所の設定から始まる——

土木学校の修了証を少し前に取得したわたしは、最初の職業上の仕事のた

め、ある夜アランフェスに来ており、平和公の邸宅と呼ばれ栄華を誇った時代の、赤いダマスク織りの衝立を変わず保ち続けるような宿屋に逗留していた。Provisto hacía algún tiempo de mi diploma en la Escuela de Caminos, hallábame una noche en Aranjuez, adonde me habían llevado mis primeros deberes profesionales, hospedado en aquella fonda que aún conserva las mamparas de damasco rojo de la época en que se enorgullecía llamándose residencia del Príncipe de la Paz. (*Lp* final: 393)

「土木学校の修了証を少し前に取得」していたということは、後篇第19章末（第3学年前期）⁴⁷⁾ から、最低2年半、おそらく3年ほどの時間が経過したことになる。また、前篇『あるキリスト教徒の女』の第1章冒頭が、土木学校入学のエピソードだったことを思い起こすとき、『あるキリスト教徒の女』の書き出しと『試練』最終章の書き出しが、土木学校への入学と修了というエピソードを介して、照応関係にあることも分かる。そのように作者によって構想されたわけである。

「アランフェス」はマドリード近郊の、王家の離宮のある避暑地であり、サルスティオは、元々は「平和公」の称号を授与された政治家ゴドイ（Manuel de Godoy: 1767-1851）の大邸宅だったホテルに滞在している。前章までのマドリードにおけるハンセン病の叔父の看病やお金に窮乏する生活と、明確なコントラストをなしている。

そのアランフェスの宿に、親友ルイス・ポルタルがいきなり訪ねてきて、結婚するので介添人になって欲しいと頼む。サルスティオは、ポルタルから一度は別れた恋人と結婚することになった経緯を聞いた後、次のように切り出す――

「今日はもうマドリードに帰る列車もないし、ふたりで一緒に過ごす最後の夜になるのだから」とわたしは彼に言った。「わたしが書いた素描、ある種の小説あるいは自伝を君に読んであげたいと思うんだ。君も覚え

ているだろう、亡くなった叔父フェリペの奥さんとわたしとの、愛が半分、心理が半分のあの作り話のことを」

—Pues ya que hoy no tienes tren para volver a Madrid, y que es la última noche que pasamos juntos —le dije— me entran ganas de leerte unos borrones que escribí... una especie de novela o de autobiografía... sobre todo aquello... ¿bien te acordarás? aquel infundio mitad amoroso y mitad psicológico que tuve con la mujer de mi difunto tío Felipe. (*Lp* final: 395)

すなわち、ここに来てやっと読者は、本作が20代後半に成長したサルスティオが、大学時代を回想して書いた自伝体小説だと分かる。テキストの語りの枠構造が明示されるのだ。

しかし、サルスティオは、自分の話に登場し、すべての事情を熟知しているポルタルに、本作を“infundio”だと紹介している。“infundio”とは、「概して偏ったうそ、作り話、偽りの知らせ」⁴⁸⁾。最後の最後になって、語り手「わたし」は *Uc-Lp* を彼にとって「偽りの物語」だと規定する。読者はこの発言に呆れるほかない。その後も、サルスティオは引き出しから取り出した原稿について、次のように説明するに留まる——「そこに心地よい気晴らし、リフレッシュできる一風呂を見出し、おかげで非常につまらない勉強をしなければならなかった最後の時期に、迷いから覚まさせてくれた」“en los cuales había encontrado delicioso entretenimiento, un baño de frescura, que me desimpresionaba del último período de mis aridísimos estudios.” (*Lp* final: 395)。

対して、ポルタルは、「作り話」というサルスティオの発言に反するようには、「極めて本当だ」“muy auténtico”と指摘する——「ふたりの間に疑いなく、とても包み隠されてはいたが、極めて本当にあった情熱のドラマ」“drama de pasión que indudablemente existía entre ambos, muy

tapadito, pero muy auténtico” (*Lp* final: 397)。

要するに、全篇の最終章、テキストの枠構造が示されると同時に、「自伝」としての信憑性に読み手が疑念を抱くよう、*Uc-Lp* は構想されているのだ。

主人公サルスティオは、全篇を通してみずからの言動と心理によって、読者の信頼を失っていく。同時に、男性としても、カルメンという女性に対し、みずからの「男性性」を低下させていく。同様に、語り手としての「わたし」も、最終章に至るまで「信頼できない語り手」という印象を読者に強く与え続ける。読者は、主人公サルスティオ＝語りの主体「わたし」が「信頼できない」という前提のもと、*Uc-Lp* という小説世界を解釈せざるをえないことになるのである。

「前篇」終わり

【本研究は科研費（基盤研究 C 21520337）の助成を受けたものである】

《注》

- 1) 『キリスト教徒の女』初版の最終ページには「前篇おわり」「FIN DE PRIMERA PARTE」、『試練』初版の扉には『『あるキリスト教徒の女』の後篇』“Segunda parte de UNA CRISTIANA”というサブタイトルが付記されている。『あるキリスト教徒の女』と『試練』は1890年の初出以来、単体で刊行されたことがなく、全集版ではこうした記載は完全に削除されている。
- 2) 本稿で使用する「女性性」「feminidad」と、これに対立する「男性性」「masculinidad」というタームは、主に、R. Medina y B. Zocchi 編による *Sexualidad y escritura* (1850-2000) の序論と第1部“Feminización y masculinización”に収められた論考から援用した。エクリチュール・フェミニンの旗手として名高いエレヌ・シクスーが指摘するように、「女性性」は「いま政治的にコード化されつつある語」であり、使いにくい言葉であるが、他に適切な言葉がないためさしあたり使わざるをえない。エレヌ・シクスー「エクリチュール、女性性、フェミニズム」岩野卓司訳『セクシュアリティ』水声社、2012年、8ページ。
- 3) 厳密には、背表紙には“Pardo Bazán”，表紙には“E. Pardo Bazán”と記載されている。
- 4) L. Alas “Clarín”, “Palique”, *Madrid Cómic* 396 (20-IX-1890). *Obras completas VII: Artículos* (1882-1890), Oviedo: Nobel, 2004, p. 1109. “esperaba

cosa muy distinta bajo el título *sugestivo* que había escogido la autora de *San Francisco de Asís*; creía que iba a ver, si no una sincera, patética, natural confidencia de la misma dama, cristiana también, que escribía, por lo menos algo que en reflejo me hablase *de una vez*, la primera, de las cosas hondas e importantes de que jamás ha hablado doña Emilia, a pesar de su catolicismo y su naturalismo.”

- 5) E. Pardo Bazán, *Una cristiana, Obras completas III (novelas)*, D. Villanueva y J. M. González Herrán, ed., Madrid: Fundación José Antonio de Castro, 1999, p. 5. なお本論文では、以後、*Una cristiana* と *La prueba* からの引用はすべてこの全集版からのものとし、丸カッコ内に *Uc*, *Lp* という略号と章、ページを記す。また邦訳は筆者によるものである。
- 6) スペインにおいて、1868 年の 9 月革命により、女性の高等教育の状況は劇的に改善した。例えば 1872 年、バルセローナ大学医学部に最初の女性が入学している。しかし、1875 年以降、王政復古体制が進むにつれ、保守的な対応が採られるようになり、1888 年からは大学に入学するために特別許可が必要となった。この法律が廃止されるのは 1910 年のことであり、スペインの全大学で 1872 年から 1910 年までの 39 年間に大学課程を修了した女性は 53 人にすぎない。次の文献を参照：Catherine Jagoe, “La enseñanza femenina en la España decimonónica”, Catherine Jagoe, Alda Blanco, Cristina Enríquez de Salamanca, eds., *La mujer en los discursos de género: textos y contextos en el siglo XIX*, Barcelona : Icaria, D.L., 1998, pp. 105-145.
- 7) L. Alfonso, “Novelas españolas. *Una cristiana* y *La prueba*. I”, *La época* 13.675 (21 de IX de 1890). “La autora de *Un viaje de novios* teme, sin duda, que escribiendo con circunspección, delicadeza y recato dé en afeminado lo escrito y ella parezca una *litterata* ó *poetisa* según el concepto desdeñoso con que se emplea á menudo estos vocablos.”
- 8) *Ibid.* “Todo su empeño, de algún tiempo acá, á medida que más ha ido escribiendo y granjeando fama, es pasar por hombres á los ojos del lector. Así lo acreditan, más que ninguna de sus obras precedentes, las dos últimas: *Una cristiana* y *La prueba*. Pero el mal está en que por más que Salustio —el relator, no el protagonista de la novela— se esfuerce en pensar, hablar y proceder con la desenvoltura y crudeza propias de varón, el que lee tiene siempre ante la vista la portada del libro, donde dice *Emilia* y no *Emilio*. Al menos Mad. Dudevant, aunque ni por sueños escribía con el desenfadado de la Sra. Pardo Bazán, estampaba Jorge Sand, y no Aurora Dupin en el frontispicio de sus obras, amén de usar ropas masculinas durante largo tiempo.”

- 9) C. Bravo Villasante, ed., *Emilia Pardo Bazán. Cartas a Benito Pérez Galdós* (1889-1890), Madrid: Turner, 1978, p. 57. “Por el camino he pensado una novela; pero no se titula El Hombre; se tiene que titular (a ver si te gusta) *Titi Carmen*. Es la historia de una señora virtuosa é intachable; hay que variar la nota, no se canse el público de tanta cascabelera. El hombre de todos modos es muy buen título. He pensado también hacer una novela sobre *el Verdugo*; el verdugo actual. ¿Qué opinas?”
- 10) カステラール Emilio Castelar (1832-1899)：個人主義的な共和主義を信奉するマドリード大学教授だったが、王政批判の発言で解雇させられ、これに抗議する学生と官憲がマドリード市中で衝突、「聖ダニエルの夜」事件（1865年4月10日）が起きる。1868年の九月革命を契機に、共和派の代表として政界に入り、第一共和制期には外務大臣、そして大統領に選出される（1873年9月7日～1874年1月3日）。秩序回復をねらって議会の閉会し政令による統治をおこなうが、事態収拾に失敗、辞任する。関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系スペイン史2』山川出版社、2008年、39-54頁を参照した。
- 11) ビ・イ・マルガイ Franciso Pi y Margall (1824-1901)：連邦共和制の普及に努めた政治家で、彼の連邦主義理念は1850年代以後、共和派の人びとの心をとらえる。第一共和制期には内務大臣、後にスペインは「連邦共和政」と宣言し大統領に選出される（1873年6月11日～7月18日）。一連の改革を進めようとしたが、カントナリスタ蜂起への武力弾圧を避けようとして辞任した。前述書同頁を参照した。
- 12) “*Africana*”（『アフリカの女』Giacomo Meyerbeer 作曲、1865年4月28日パリ・オペラ座初演のオペラ），“*Hugonotes*”（『ユグノー』Giacomo Meyerbeer 作曲、1836年2月29日パリ・オペラ座初演のオペラ）など（*Uc* II: 25）。
- 13) M. Bieder, “Emilia Pardo Bazán y la emergencia del discurso feminista”, I. M.^a Zavala, coord., *Breve historia feminista de la literatura española (en lengua castellana)*, V. *La literatura escrita por mujer (Del siglo XIX a la actualidad)*, Barcelona: Anthropos, 1998, p. 88.
- 14) *Uc* I: 6.
- 15) デンドルは *Uc-Lp* を人種的遺伝・本能に関するバルド＝バサンの考えがもっとも顕著に見出せる小説として挙げる。文化や歴史ではなく先祖の人種が個人の気質や振る舞いを大まかに規定すると、彼女が考えていた。とくに、カルドッソ家において遠い祖先のユダヤ人の特徴が世代毎に交互に現れ出る——サルスティオの叔父と母の世代に現れ、彼本人には現れない——一点に着目し、19世紀後半、フランスの精神病理学者リボ（1839-1916）やイタリアの精神医学者ロンブローゾ（1835-1909）が提示した「隔世遺伝」“atavism”説の影響を指摘する。そして、バルド＝バサンの他の著作から「ユダヤ人への敵意」を読み取り、それにサ

ルスティオの数々の言表を合わせて解釈することによって、——パルド＝バサンの反ユダヤ主義が、当時の科学的な人種理論によって補強された宗教的偏見、すなわち、19世紀末のナンセンスな科学信奉に因るものに他ならない、と留保付きではあるが——、*Uc-Lp*における「激しい反ユダヤ主義」の発現を告発している。

確かに、デンドルが指摘するように、科学主義者を標榜するにもかかわらずサルスティオはユダヤ人への本能的嫌悪を克服できない。彼のなかで、理性が感情を抑えることは不可能である。

しかし、*Uc-Lp*でユダヤ人への嫌悪を露わにしているのは、作中人物（主にサルスティオやカルメン）であって、作者パルド＝バサンではない。「自己物語世界的な」語りにおいて、反ユダヤ主義的なものも含めテキスト内のすべての言表は、原則的に語り手「わたし」に帰されるべきであり、それを作者の考えの表明だと解するのは短絡的ではないだろうか。科学的実証主義を標榜する理系の大学生サルスティオが、当時広まっていた人種の遺伝、とくに隔世遺伝の説をもとに、叔父の容貌や欲深さをユダヤ人の祖先と関連づけたというのは、*Uc-Lp*における虚構上の設定にすぎないのだから。B. J. Dendle, “The Racial Theories of Emilia Pardo Bazán”, *Hispanic Review* 38.1 (1970): 17–31.

- 16) N. Santiañez-Tió, “Entre el realismo y el modernismo: voz narrativa y deseo triangular en *Una cristiana-La prueba*”, *Castilla* 19 (1994): 190.
- 17) T. A. Cook, *El feminismo en la novela de la Condesa de Pardo Bazán*, La Coruña: Diputación Provincial, 1976, p. 42.
- 18) A. Zamora, “La maldición epistolar en *Tormento*: reflexiones sobre la propiedad de una carta de mujer”, R. Medina y B. Zocchi (eds.), *Sexualidad y escritura* (1850–2000), Rubí (Barcelona): Anthropos, 2002, p. 68.
- 19) N. Santiañez-Tió, *op. cit.*, p. 191.
- 20) 福島章『ストーカーの心理学』PHP 研究所, 2002 年, 90 ページ。
- 21) “Por **la calle de Jorge Juan** bajó hacia **la plaza de Colón**, y desde allí, con gran sorpresa mía, en vez de tomar hacia **el Prado** para dirigirse a **las Pascualas**, subió por **la ronda de Recoletos**.” (*Lp* VIII: 271); “Al final de la ronda dudó un instante qué dirección tomaría; por fin, describiendo con viveza un arco de círculo, se metió por la lengua **calle de Almagro**. «¡Cosa más rara! —discurría yo—. Lo que es por aquí, no habrá ninguna iglesia de las que ella suele frecuentar». No la había tampoco en **la calle del Cisne**, por donde torció hacia **Chamberí**.” (*Lp* VIII: 272)
- 22) W. T. Pattison, “Chap. 7. 2: *Una cristiana* (A Christian Woman) and *La prueba* (The Test)”, *Emilia Pardo Bazán*, New York: Twayne Publishers, Inc., 1971, p. 70.
- 23) 福島, 上掲書, 23–24 ページ。

- 24) 『ロングマン英和辞典』ピアソン・エデュケーション, 2007年, 1639ページ。
- 25) 福島, 上掲書, 14ページ。
- 26) N. Santiáñez-Tió, *op. cit.*, p. 193.
- 27) M. Mayoral, “De *Insolación* a *Dulce dueño*. Notas sobre el erotismo en la obra de Emilia Pardo Bazán”, *Eros literario: actas del coloquio celebrado en la Facultad de Filología de la Universidad Complutense en diciembre de 1988*, Madrid: Universidad Complutense, 1989, p. 130.
- 28) 福島は, ストーカーの心理的状态を次の5つに類型化している——1. 精神病系, 2. パラノイド系, 3. ボーダーライン系, 4. ナルシスト系, 5. サイコパス系。福島, 上掲書, 79ページ。
- 29) “Le tuve la parada, y al verla bajarse del **tranvía de Atocha**, acerqueme a ella con rapidez.”, “Dudó, y por fin se avino a aproximarse a la esquina de **la calle del Fúcar**.” (*Lp* X: 293-4) fig. 8 参照のこと。
- 30) N. Cièmessy, *Emilia Pardo Bazán como novelista: de la teoría a la práctica*, Tr. Irene Gamba, Madrid: Fundación Universitaria Española, 1982, II, pp. 645-646.
- 31) M. López, “En torno a la segunda manera de Pardo Bazan: *Una cristiana* y *La prueba*”, *Hispanófila* 63 (1978): 74.
- 32) N. Santiáñez-Tió, *op. cit.*, p. 189, p. 194.
- 33) L. Alas “Clarín”, “Palique”, *Madrid Cómic* 397 (27-IX-1890), *Obras completas VII: Artículos* (1882-1890), Oviedo: Nobel, 2004, p. 1112. “En vez de esto se entretiene en seguir las divagaciones del estudiante de ingenieros, que... al fin es un muchacho de mediano ingenio, poca formalidad y superficial com él solo.”
- 34) L. Alfonso, “Novelas españolas. *Una cristiana* y *La prueba*. II”, *La época* 13.676 (22 de IX de 1890). “Salustio, insisto en ello, ó más bien insiste la autora, es anodino; no tiene empuje para el bien ni para el mal; no rebasa ni por un instante el linde de la medianía. [...] En Salustio, todo, en suma, es negativo.”
- 35) ハンセン病というテーマをロペスは作家パルド＝バサンの「精神主義的傾向」という文学性にも関連づけている：M. López, *op. cit.*, p. 75。しかし, 19世紀末スペインにおいてハンセン病は, 幾つかの地方, とくにガリシア地方に残存しており, *Uc-Lp* の主要な舞台のひとつ Pontevedra 近郊に位置する島 La Toja にはハンセン病患者のための湯治施設が存在した。パルド＝バサン家は間近の村 Sangenjo に別荘 (Torre de Miraflores) を所有しており, エミリアは幼少の折, 毎夏海水浴に, 後には La Toja の温泉を訪れていた。これらのことを考え合わせるなら, ハンセン病という設定は, 単なる文学的潮流や現在の読者が感じ

る奇想天外なアナクロニズムに帰着させるべきではなく、歴史的事実・経験にもとづいたものだと言えるだろう。B. Varela Jácome, *Estructuras novelísticas de Emilia Pardo Bazán*, Santiago de Compostela: C.S.I.C.-Instituto P. Sarmiento de Estudios Gallegos, 1973, p. 106. P. Faus, *Emilia Pardo Bazán: su época, su vida, su obra*, A Coruña: Fundación Pedro Barrié de la Maza, 2003, I, p. 80; II, p. 28.

- 36) N. Santiáñez-Tió, *op. cit.*, p. 198.
- 37) T. A. Cook, *op. cit.*, p. 47.
- 38) N. Santiáñez-Tió, *op. cit.*, p. 191.
- 39) *Ibid.* p. 192. M. Bieder, *op. cit.*, p. 90.
- 40) M. Bieder, *op. cit.*, p. 90.
- 41) M. Hemingway, “Chap. 4 *Una cristiana-La prueba*”, *Emilia Pardo Bazán: The Making of a Novelist*, Cambridge: Cambridge U. P., 1983, p. 69.
- 42) 他の用例: “Hízome gran impresión aquel tipo original, con quien más adelante hube de trabar relaciones que **en nada interesan al curso y desarrollo de la presente historia.**” (*Lp* III: 227)
- 43) L. Alas “Clarín”, “Palique”, *Madrid Cómic* 385 (5-VII-1890). *Obras completas VII: Artículos (1882-1890)*, Oviedo: Nobel, 2004, p. 1062. “la **autobiografía** es inútil y hasta enojosa en libros escritos de esa manera; llega a ser completamente **inverosímil, absurdo**, que todo aquello lo haya conservado en la memoria el estudiante de Caminos. [...] En toda autobiografía, aun admitiendo el convencionalismo de los diálogos exactos, de la adivinación de ajenas intenciones, etcétera, etcétera, **ha de predominar el subjetivismo**”.
- 44) N. Santiáñez-Tió, *op. cit.*, p. 188, p. 190, p. 195.
- 45) *Ibid.* p. 196, p. 198.
- 46) M. Bieder, *op. cit.*, p. 89, p. 91.
- 47) 『キリスト教徒の女』第1章の時点でサルスティオは21歳で5年制の土木学校の第2学年に進級している — “hube de encontrarme a los veintiún años cursando el segundo de la carrera; es decir, faltándome tres para terminarla.” (Uc I: 6)。続いて第5章で第2学年の学年末試験に合格 — “aquel año aprobé mis asignaturas” (Uc V: 43)。ということは、第20章の時点で第3学年に進級したことになる。ただし、その後大病を患い、『試練』第1章の時点で、ほぼ1年を棒にしている — “la rara historia de mi alma durante el período de un año” (*Lp* I: 202)。結果、第10章で学年末試験に失敗し、落第。つまり、第16章でマドリードに戻った時点で、第3学年に留年している。第17章の時点で、まだ暖炉に火を入れるほど寒くないということは、季節は秋となる — “La verdad es que el aire era templado y suave, y que no hacía la chimenea

maldita falta” (*Lp* XVII: 368)。すなわち、サルスティオは第19章末、第3学年の前期に在籍していたことになる。

- 48) “Menitra, patraña o noticia falsa, generalmente tendenciosa.” Real Academia Española, *Diccionario de la Lengua Española* 22 ed., Madrid: Espasa Calpe, 2001, p. 1275.

《文献リスト》

一次資料

- Pardo Bazán, Emilia. (1890). *Una cristiana*. Madrid: La España Editorial, sin año. *Obras completas III (novelas)*, D. Villanueva y J. M. González Herrán, ed. Madrid: Fundación José Antonio de Castro, 1999, pp. 1-195.
- . (1890). *La prueba (Segunda parte de Una cristiana)*. Madrid: La España Editorial, sin año. *Ibid.*, pp. 197-401.
- Pérez Galdós, Benito. (1884). *Tormento*, A. Porras Moreno, ed. Madrid: Castalia, 2001.
- Bravo Villasante, Carmen, ed. 1978. *Emilia Pardo Bazán. Cartas a Benito Pérez Galdós (1889-1890)*. Madrid: Turner.

参考文献

* *Uc-Lp* に関する研究

- Alas, Leopoldo “Clarín”. (1890). “Palique.” *Madrid Cómico* 385 (5 de VII); 386 (12-VII); 396(20-IX); 397(27-IX); 401(25-X). *Obras completas VII: Artículos (1882-1890)*. Oviedo: Nobel, 2004, pp. 1060-1062; pp. 1062-1065; pp. 1108-1111; pp. 1112-1114; pp. 1127-1129.
- Alfonso, Luis. 1890. “Novelas españolas. *Una cristiana* y *La prueba*. I y II” *La época* 13.675 (21 de IX); 13.676 (22 de IX).
- Bieder, Maryellen. 1997. “Intertextualizing Genre: Ambiguity as Narrative Strategy in Emilia Pardo Bazán.” J. P. Brownlow and J. W. Kronik, eds. *Intertextual pursuits: literary mediations in modern Spanish narrative*. Lewisburg: Bucknell U.P.; London: Associated University Presses, pp. 57-75.
- . 1998. “Emilia Pardo Bazán y la emergencia del discurso feminista.” I. M.^a Zavala, coord. *Breve historia feminista de la literatura española (en lengua castellana), V. La literatura escrita por mujer (Del siglo XIX a la actualidad)*. Barcelona: Anthropos, pp. 75-110.
- Bravo Villasante, Carmen. (1962). *Vida y obra de Emilia Pardo Bazán*. Madrid: Magisterio Español, 1973, pp. 185-187.
- Cantero Rosales, M. Ángeles. 2011. “El ángel del hogar y la feminidad en

- la narrativa de Pardo Bazán." *Revista electrónica de estudios filológicos* 21 (julio). (http://dialnet.unirioja.es/servlet/listaarticulos?tipo_busqueda=EJEMPLAR&revista_busqueda=4271&clave_busqueda=287044, 2012/03/07)
- Charnon-Deutsch, Lou. 1994. "Chapter 2: Social Masochism and the Domestic Novel." *Narrative of desire: nineteenth-century Spanish fiction by women*. University Park, PA: Pennsylvania State University Press, pp. 41-77.
- Clèmessy, Nelly. (1973). *Emilia Pardo Bazán como novelista: de la teoría a la práctica*, Tr. Irene Gamba. Madrid: Fundación Universitaria Española, 1982, I, pp. 245-247, pp. 355-371; II, pp. 569-593, pp. 639-657.
- Cook, Teresa A. 1976. *El feminismo en la novela de la Condesa de Pardo Bazán*. La Coruña: Diputación Provincial, pp. 32-54.
- Dendle, Brian J. 1970. "The Racial Theories of Emilia Pardo Bazán." *Hispanic Review* 38.1: 17-31.
- Dorado, Carlos. 2009. "Introducción a *La Revolución y novela en Rusia*." E. Pardo Bazán, *La cuestión palpitante: estudio introductorio de Laura Silvestri; La revolución y novela en Rusia, La nueva cuestión palpitante: estudios introductorios de Carlos Dorado*. Madrid: Editorial Bercimuel, pp. 175-215.
- Etreros, Mercedes. 1993. "Influjo de la narrativa rusa en doña Emilia Pardo Bazán. El ejemplo de *La piedra angular*." *Anales de Literatura Española* 9: 31-43.
- Gómez-Ferrer, Guadalupe. 1990. "Mentalidades, patrones de conducta femenina en la España de la Restauración." *Estudios históricos: homenaje a los profesores José M.^a Jover Zamora y Vicente Palacio Atard*, Vol. 2. Madrid: Universidad Complutense, 1990, pp. 703-730.
- Hemingway, Maurice. 1983. "Chap. 4 *Una cristiana-La prueba*." *Emilia Pardo Bazán: The Making of a Novelist*. Cambridge: Cambridge U. P., pp. 64-88.
- López, Mariano. 1978. "En torno a la segunda manera de Pardo Bazán: *Una cristiana y La prueba*." *Hispanófila* 63: 67-78.
- Mayoral, Marina. 1989. "De *Insolación* a *Dulce dueño*. Notas sobre el erotismo en la obra de Emilia Pardo Bazán." *Eros literario: actas del coloquio celebrado en la Facultad de Filología de la Universidad Complutense en diciembre de 1988*. Madrid: Universidad Complutense, pp. 127-136.
- Osborne, Robert E. 1964. *Emilia Pardo Bazán: su vida y sus obras*. México, DF: Ediciones de Andrea, pp. 101-105.
- Pattison, Walter T. 1971. "Chap. 7. 2: Una cristiana (A Christian Woman) and La prueba (The Test)." *Emilia Pardo Bazán*. New York: Twayne Publishers, Inc., pp. 66-71.

- Santiáñez-Tió, Nil. 1994. "Entre el realismo y el modernismo: voz narrativa y deseo triangular en *Una cristiana-La prueba*." *Castilla* 19: 187-205.
- Varela Jácome, Benito. 1973. *Estructuras novelísticas de Emilia Pardo Bazán*. Santiago de Compostela: C.S.I.C.-Instituto P. Sarmiento de Estudios Gallegos, pp. 59-61, pp. 103-107.
- Villanueva, D y J. M. González Herrán. 1999. "Introducción." E. Pardo Bazán, *Obras completas III (novelas)*. Madrid: Fundación José Antonio de Castro, pp. IX-XXVIII.
- Wietelmann Bauer, Beth. 1995. "Catholicism, Feminism, and Anti-Semitism in Pardo Bazán's *Una cristiana-La prueba*." *Letras Peninsulares* 8.2 (Fall): 295-309.
- * パルド = バサンの伝記, 他作品, 作品全般についての研究
- Acosta, Eva. 2007. *Emilia Pardo Bazán: la luz en la batalla. Biografía*. Barcelona: Lumen.
- Faus, Pilar. 2003. *Emilia Pardo Bazán: su época, su vida, su obra*. 2 vol. A Coruña: Fundación Pedro Barrié de la Maza.
- González López, Emilio. 1944. *Emilia Pardo Bazán, novelista de Galicia*. New York: Hispanic Institute.
- Kirkpatrick, Susan. 2003. "Emilia Pardo Bazán: el sujeto femenino de la estética modernista." *Mujer, modernismo y vanguardia en España (1898-1931)*, tr. Jacqueline Cruz. Madrid: Cátedra, pp. 85-127.
- * その他
- González-Allende, Iker. 2009. "De la romántica a la mujer nueva: la representación de la mujer en la literatura española del siglo XIX." *Letras de Deusto* 39.122 (enero-marzo): 51-76.
- Jagoe, Catherine, Alda Blanco, Cristina Enríquez de Salamanca, eds. 1998. *La mujer en los discursos de género: textos y contextos en el siglo XIX*. Barcelona: Icaria, D.L.
- Lida de Malkiel, M. R. (1951). "'Arpadas lenguas.'" *Estudios dedicados a Ramón Menéndez Pidal II*. Madrid: CSIC, pp. 227-252. *La tradición clásica en España*. Barcelona: Ariel, 1975, pp. 207-239.
- Medina, Raquel y Barbara Zocchi (eds.). 2002. *Sexualidad y escritura (1850-2000)*. Rubí (Barcelona): Anthropos.
- Tolliver, Joyce. 2002. "La voz antifeminista y la amenaza 'andrógina' en el fin de siglo." R. Medina y B. Zocchi (eds.), *op.cit.*, pp. 105-119.
- Zamora, Andrés. 2002. "La maldición epistolar en *Tormento*: reflexiones sobre la propiedad de una carta de mujer." R. Medina y B. Zocchi (eds.), *op. cit.*, pp.

60-81.

大楠栄三 2011 「〈新しい女〉の語り — パルド＝バサン『日射病』(1889)の始まり —」『明治大学教養論集』466号, 17-76 ページ。

———— 2012 「誰の『愛の物語』? — パルド＝バサン『郷愁』(1889)の始まりと『スペインの女性』——」『明治大学人文科学研究所紀要』71冊, 113-175 ページ。

関哲行・立石博高・中塚次郎編 2008『世界歴史大系スペイン史 2』山川出版社。

デリダ, ジャック他 2012『セクシュアリティ:別冊水声通信』水声社。

福島章 2002『ストーカーの心理学』PHP 研究所。